

開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

February, 2026

2月号

北海道新時代

インフラツーリズムと地域共創

第13回ほっかいどう学連続セミナー

座談会「地域活動」と「地域プライド」

シリーズ「地域コミュニティ」

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて

地方創生

第3期東神楽町地方版総合戦略

ガストロノミックツーリズムin北海道

「宗谷」

ほっかいどう学

リニューアル赤れんが庁舎は何を物語るか?その2





北海道遺産
Hokkaido Heritage

『流氷のまち』（『北海道遺産フォト&短歌チャレンジ2024』入選作品）

撮影者 野口 武 様
北海道遺産 「流氷とガリンコ号」

冬のオホーツク沿岸に押し寄せる海の邪魔者を逆手に取った流氷観光。紋別市ではアラスカの油田開発用に試験的に作られた砕氷船を「ガリンコ号」と名付け、流氷の海へ乗り出した。沖合約500mのオホーツクタワーでは、海底7.5mから流氷観察や流氷下のさまざまな生態の観測ができる。流氷の神秘や流氷がもたらす恵みなど、その大切さを訴え、紋別市は流氷研究国際都市を宣言している。

Contents

北海道新時代①

- インフラツーリズムと地域共創
ー十勝岳インフラ・ジオツアー催行までー 1
国土交通省北海道開発局開発監理部開発連携推進課

北海道新時代②

- 第13回ほっかいどう学連続セミナー
ー人口減少加速の北海道
まちづくりと教育はどうなる、どうするー 5
国土交通省北海道開発局開発監理部開発計画課

北海道新時代③

- 座談会「地域活動」と「地域プライド」
ー地域の今を支え、未来につなぐー 11
（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所

シリーズ「地域コミュニティ」〈7〉

- 北海道における地域コミュニティの活性化に向けて
ー地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組みー 17
（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所

地方創生

- 第3期東神楽町地方版総合戦略 21
東神楽町役場まちづくり推進課

ガストロノミックツーリズムin北海道

- ー食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅ー 第6話
「宗谷」 25
遊佐 順和

「ほっかいどう学」第51回

- リニューアル赤れんが庁舎は何を物語るか？その2 29
杉浦 正人

海外レポート 第43回

- 瀋陽で過ごした三年間 33
岩本 卓也

わが村は美しくー北海道 未来へつなぐ 第60回 ー稚内市ー

- 日本最北端の稚内ブランド『稚内牛乳』 37
北宗谷農業協同組合 稚内支所稚内牛乳

もものくいしんぼうすけっぴより 第53回

- 山を考える 山は自然のもの？人のもの？ 38
すずき もも

地域おこし協力隊 第53回 ー名寄市ー

- 思わぬ縁から趣味が仕事へ
ー名寄で見つけた新たな挑戦ー 40
阿部 真樹

「活動報告レポート」ー遠別町ー

- 少しずつ、右肩あがりのえんべつに。ヒトモノコトを
つなぎなおして、しなやかに持続するまちへ 42
NPO法人 えんおこ

お知らせ

- シンポジウム「北海道らしい再エネ活用と
地域活性化を目指して」のご案内 44
シンポジウム『持続可能な地域コミュニティに向けて』のご案内 45
令和8年度 地域活性化活動助成募集のご案内 46
第39回寒地土木研究所講演会Web配信（収録版） 47
お知らせ 48



インフラツーリズムと地域共創 十勝岳インフラ・ジオツアー催行まで

国土交通省北海道開発局開発監理部開発連携推進課

はじめに

インフラツーリズムは、多くの方々にインフラの役割について理解を深めていただくことができるほか、インフラという地域資源を活用して地域経済を活性化することも可能であり、その社会的意義は大きいものです。

こうしたインフラツーリズムの概念は、2013年に閣僚会議で取りまとめられた「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」において打ち出されました。この頃から、北海道開発局では、全国に先駆けて観光としてのインフラツーリズムに取り組み、インフラ見学を旅行行程に取り入れたツアーを旅行会社に催行いただく「公共施設見学ツアー」を開始しました。現在では、北海道開発局と地域の共創により、公共施設と様々な地域資源を組み合わせ、地域発展のストーリーを創り、旅行会社などに企画・催行していただく「地域共創インフラツアー」に発展しています。

インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト

2016年には「明日の日本を支える観光ビジョン」が策定され、観光を日本の成長に貢献する産業として政府全体で取り組む中で、国土交通省では2018年に『インフラツーリズム有識者懇談会』を設立しました。その実証的な取り組みとして、「インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト」を立ち上げ、全国からモデル地区を選定し、社会実験として先進的に取り組むことで、その知見を全国に展開しています。

北海道では2020年に東日本最大の吊り橋である『白鳥大橋（室蘭市）』がモデル地区に選定されました。

インフラ施設を管理する機関の職員が案内する場合、回数・時期などに制約が出てくるのが課題であったところですが、室蘭市をはじめ関係機関と室蘭開発建設部の共創により、開発局の職員ではなく民間のガイドによる案内で白鳥大橋の主塔登頂体験を提供するコンテンツと運営の仕組み作りが行われました。現在では、地域の取り組みとして、ツアーが催行され、海上100mから、室蘭港の工場群と大自然を一望する360°の大パノラマを体験していただけます。

十勝岳砂防施設のモデル地区選定

さらに、2023年には、「インフラツーリズム魅力倍增プロジェクト」のモデル地区に、十勝岳の噴火に備える砂防事業である、美瑛町の『青い池（美瑛川ブロック堰堤）』と『十勝岳火山砂防情報センター』が合わせて1地区として加えられ、ツアー造成の検討が進められることになりました。

選定された「青い池」については、十勝岳の噴火により発生する火山泥流から地域を守るために設置された堰堤に水がたまり、美しい景観となったものです。その写真がApple社製コンピューターの壁紙に採用されたことにより、世界的に知られる観光地となりました。既にインバウンド客が多数訪れる観光資源としては成立していましたが、その景観が注目された「青い池」からどのようにインフラとしての魅力を引き出して伝えるのが課題でした。



美瑛川ブロック堰堤と青い池

地元協議会での検討の開始

検討を進めるに当たっては、白鳥大橋に引き続き、インフラツーリズム有識者懇談会の有識者として、跡見学園女子大学の篠原靖先生にご支援いただきました。八ッ場ダム（群馬県）、首都圏外郭放水路（埼玉県）を手掛けられたインフラツーリズムの第一人者です。

美瑛町の観光の特徴は、青い池や美しい丘の観光を中心に年間200万人以上（美瑛町の人口の200倍）が訪れる一方、通過型の観光となっています。篠原先生のアドバイスによって、経済効果が期待できる滞在型観光へ転換するための取り組みのひとつとして検討が進められることになりました。

インフラ・ジオツアーへの発展

インフラツアーとして、参加者に楽しみながらその役割を知っていただくには、歴史や文化などを取り入れストーリーがある内容にすることです。1926年（大正15年）には十勝岳の噴火によって発生した泥流が美瑛川、富良野川に流れ込み、下流の町に甚大な被害を及ぼしました。また、1988年の噴火の際には白金温泉地区で72名が127日間に及ぶ避難を強いられました。インフラの役割を知っていただくには、こうした災害の歴史を伝えることが重要です。



1988年の十勝岳の噴火

また、美瑛・上富良野エリアは2022年に日本ジオパークに認定されています。ジオパークとは、地球科学的に重要で貴重な価値を持つ地形や地質を保全するとともに、教育やツーリズムに活用する取り組みです。

ジオパークで提供されるツーリズムは、美しい自然景観の成り立ちや特色ある文化に感動し、そこから地域遺産への深い理解や、保護・保全に繋げようとする活動であり、これに噴火による大規模災害に備える防災インフラに触れることで、火山とともに生きる地域への理解を深め、自らの防災意識を楽しみながら学べる格好のツアーとなることから、インフラとジオパークを合わせた「インフラ・ジオツアー」として進めていくことが決まりました。

検討体制の構築に当たっては、当初、十勝岳ジオパーク推進協議会と美瑛町を中心とした体制を想定していましたが、地域の有識者の力を借りながら地域との共創でコンテンツを造成し、その運営・販売方法までの

一連を検討する必要があることから、十勝岳ジオパークを形成する上富良野町に加え、両町の観光協会にも中心的な立場でご協力をいただく運びとなりました。上富良野町にご参画いただくことで、北海道開発局の直轄施設である「美瑛川ブロック堰堤」と「十勝岳火山砂防情報センター」を主とした「美瑛コース」に加え、北海道が砂防施設の整備を進める「上富良野コース」を追加して検討が行われました。



上富良野コースの富良野川第2号透過型堰堤

シナリオとガイドの養成

ストーリーを上手に伝えるためには、まずシナリオ作りから始め、火山の成り立ちとその恵み、火山災害の歴史から防災対策の取組み。そもそも「青い池」がどのように作られたのか、どうして青いのかもあまり知られていないため、新たなストーリー作りを地域の方々と共創しながら進めました。

また、それを伝えるガイドの方々の経験の多寡により、得られる体験や満足度が大きく変わらないよう留意し、説明のセリフだけではなく、適度な質問の例や自由に見ていただくタイミング、説明の“間”の取り方など、ガイドのコツまでアドバイスするような内容にするとともに、ガイドの方々がより深い説明をできるように参考文献や専門用語の解説なども加えた本格的なマニュアルが作り上げられました。

青い池とともに対象施設となっている十勝岳火山砂防情報センターは、十勝岳の噴火に備えた監視や対応を行うだけでなく、避難所としての機能を持つ施設です。平常時は十勝岳の防災対策などを伝える展示を行

う施設として、年間1万人以上が訪れています。

この施設の展示についても、ガイドシナリオで整理した物語に沿って、展示内容を再構成しました。十勝岳ジオパーク推進協議会事務局や美瑛町観光協会、旭川地方気象台など関係機関と連携して展示内容の検討が行われ、ガイドのご案内で、インフラ・ジオツアーのストーリーを体験しながら、関係機関が連携した監視体制や砂防施設の働きについて体系的に理解していただける内容となりました。



避難所の機能も持つ十勝岳火山砂防情報センター



ツアー参加者のみ見学できる美瑛川第1号堰堤

さらに、青い池と同じ砂防施設である、美瑛川第1号堰堤を見学場所に加えました。この巨大な砂防堰堤は、ツアーに参加いただいた方々だけが間近で見ることができ、巨大な構造物と十勝岳が一体となったダイナミックな景観に没入するとともに、砂防施設が地域を守るストーリーを体験していただけます。

ツアー催行に向けて

2024年10月25日には、篠原先生、国土交通省、美瑛町などのほか、多くの所属ガイドの方々にも参加していただき、美瑛町観光協会所属のマスターガイドのご案内で、美瑛コースで実際に催行する予定と同様のツアーが試行されました。参加した所属ガイドの方々にはガイド内容の理解・習得をしていただく機会ともなりました。

ツアー催行の準備が整った2025年5月26日には、報道関係者向けの内覧会が実施され、9機関のメディアが参加し、ツアーの催行開始前に大きく報道していただきました。また、ツアー開始後も特集番組がTV放送されるなどの反響があり、順調に参加者を増やしています。

催行2年目に向けて

今年は、大正泥流が発生してから100年の節目を迎え、あらためて、本地域の歴史を知っていただくのに良い機会となります。

本ツアーについては、積雪や気温の低くなる時期が早い地域であり、施設に立ち入る期間や景観を楽しんでいただける期間が限られているため、毎年6月～9月中までの限定となります。参加方法などの詳細は5月から、十勝岳ジオパーク推進協議会のホームページに掲載される予定ですので、しばらくお待ちください。

日本で初めてインフラとジオパークを合わせた体験見学ツアーを実現させたインフラ・ジオツーリズム『十勝岳ものがたり』に、皆さんも是非ご参加ください。

十勝岳ジオパーク推進協議会ホームページ
<https://tokachidake-geopark.jp/>



マスターガイドの案内による試行ツアー



ツアーパンフレット

上富良野コース 泥流と砂防の物語

想定時間: 3時間

集合・解散	十勝岳温泉駐車場
時 間	9:00-12:00 または 13:00-16:00
料 金	10,000円(大人おひとり様)
最少催行人員	2名様
開 閉	6月～9月

モデル行程表

- 十勝岳温泉駐車場 集合
- 徒歩 1分
- 凌雲閣テラス
- 車 35分
- 上富良野町郷土館
- 車 30分
- 富良野川第2号透過型堰堤
- 車 30分
- 十勝岳温泉駐車場 解散

凌雲閣テラスからの眺望(イメージ)

富良野川第2号透過型堰堤

上富良野町郷土館

美瑛コース 『青い水はどこから来たの!?』

想定時間: 3時間

集合・解散 びえい白金温泉・白金観光センター
 時 間 9:00-12:00
 料 金 10,000円(大人おひとり様)
 最少催行人員 2名様
 期 間 6月～9月



モデル行程表

①びえい
白金温泉(発)

5分

徒歩

②白ひげの滝



滞在
15分

15分

車

③十勝岳火山砂防情報センター



滞在
20分

20分

車

④十勝岳望岳台・防災シェルター



滞在
20分

⑤美瑛川第1号堰堤



滞在
30分

5分

車

⑥白金青い池



滞在
35分

10分

車

①びえい 白金温泉(着)



インフラ・ジオツアー
ならでは体験!!

『青い池の謎を調査!!』

青く見える池の水は本当に青いのか!?
一般の方が入れない場所へ特別にご案内します。

●掲載されている写真はすべてイメージ画像となります。



第13回 ほっかいどう学連続セミナー ～人口減少加速の北海道 まちづくりと教育は どうなる、どうする～

国土交通省北海道開発局開発監理部開発計画課

北海道では人口減少や地域の担い手不足など、深刻な課題が進行しています。それらの解決の糸口を探る場として、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムが主催する「ほっかいどう学連続セミナー」が継続的に開催されています。

近年は、こうした課題に対応するため、行政と教育機関の連携も強化されています。令和7年6月には、北海道教育大学（以下「道教大」という。）と北海道開発局（以下「開発局」という。）が、北海道における将来世代の人材育成や地域活性化に向けた連携協定を締結しました。これにより、以前からあった道教大と北海道教育委員会、北海道教育委員会と開発局の協定と合わせ、三者の連携による新たな枠組みが構築されました。さらに9月には、北海道教育大学釧路校（以下「釧路校」という。）と釧路開発建設部（以下「釧路開建」という。）が覚書を交わし、地域レベルでの具体的な取組が始まっています。

この流れを受けて、第13回セミナーは釧路市で「人口減少加速の北海道 まちづくりと教育はどうなる、どうする」をテーマに開催されました。現場の声や専門家の視点が交わり、教育と地域づくりの両面から未来を描く議論が展開されました。

ここからは、当日の基調講演や発表、パネルディスカッションで印象的だったポイントをいくつかご紹介します。

【開会・趣旨説明】

認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長

新保 元康 氏



このNPOは北海道で立ち上げて7年目になりますが、「子どもたちに、もっと北海道のことを伝えたい」という思いで授業や教材づくりを進めてきました。現在、全国の小中学生は1人1台情報端末を使う時代になりました。これにより「グローバル」な学習が可能となった反面、地元を知らない子どもが増えていることを危惧しています。だからこそ、北海道で生きる子どもたちが「ここで育ってよかった」と思える教育を目指しています。

北海道の未来をつくるのは若い人たちです。その若い人たちを応援する仕組みを、皆様と話し合って作っていきたいと思います。

【来賓挨拶】

国土交通省北海道開発局釧路開発建設部長

畑山 朗



釧路開建では、令和6年3月に策定された「第9期北海道総合開発計画」に基づき地域の皆様と共に未来を創る「共創」の取組を推進しています。この計画は、食や観光など地域のポテンシャルを最大限に活かし、そのポテンシャルを生み出す地域「生産空間*」を維持・発展させることを目標としています。特にこの釧路・根室地域は、豊かな食材や自然環境に恵まれた観光地として高い可能性を持っています。

この地域の課題を克服し、維持・発展させるためにはインフラ整備だけでなく、若い世代の方々に地域への愛着や誇りを持ってもらうことが重要です。そのため9期計画では、「ほっかいどう学」による地域に貢献する若い世代の育成に取り組むことが盛り込まれております。

今年6月に道教大と開発局が連携協定を締結し、9月には釧路校と釧路開建が覚書を交わしました。10月

* 生産空間：主として農業・漁業に係る生産の場（特に市街地ではない領域）を指す。生産空間は、生産のみならず、観光、脱炭素化に資する森林資源、豊富な再生可能エネルギー導入ポテンシャル、その他多面的・公益的機能を提供し、北海道の価値を生み出している。

には釧路湿原で学生によるフィールドワークを実施し、その写真や動画を使用したデジタル教材を作成していただきました。質の高い成果に大きな期待を寄せています。また、学生の皆さんにインフラ整備の歴史や必要性を理解していただき、将来先生になったときに子どもたちへ伝えてもらい、その子どもたちが地域に誇りを持ち、支えてくれることを願っています。

【基調講演】

「北海道の教育から見えてくる未来

～連携協定への期待～

国立大学法人北海道教育大学特任教授

(前北海道教育大学副学長) 玉井 康之 氏



次期学習指導要領の柱は「探究」と「主体的な活動」です。子どもたちが自ら体験し、課題を発見しながら学ぶことが求められています。教科書だけでなく、地域に出て問題を見つける学びが不可欠です。地域を見れば全国の課題も見えてきます。こうした発想を育てることが、次の学習指導要領の大きな課題です。

釧路校と釧路開建の覚書には、①へき地・小規模校教育など地域課題を克服する教員・人材の育成、②児童・生徒向け教材開発とフィールドワーク、③防災教育・啓発の推進という重要項目が盛り込まれています。開発局の専門的知識を教育に取り入れ教材化し、教育の役割は道教大が担います。

釧路校と釧路開建の覚書には、①へき地・小規模校教育など地域課題を克服する教員・人材の育成、②児童・生徒向け教材開発とフィールドワーク、③防災教育・啓発の推進という重要項目が盛り込まれています。開発局の専門的知識を教育に取り入れ教材化し、教育の役割は道教大が担います。

■地域課題を学びに活かす探究と主体性の育成

北海道、特に道東は人口減少が深刻で、担い手不足により15万ヘクタールの農地が荒廃しています。学校の統廃合は地域経済にも影響し、若者の地域離れを加速させています。子どもたちが「地域には何もない」と感じると、学習意欲も低下します。逆に地域への誇りを育めば、前向きな姿勢が生まれます。例えば開発局が整備した道路がどんな歴史を持ち、先人がどんな苦労をしたかを伝えることで、地域をもっと大事にしなければと思うようになります。

戦後に論争となった「地域を育てる学力」は、今再び問われています。学力は点数を上げるためだけでなく、社会や地域に役立てる力であるべきです。次期学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が強調され、学んだ知識を地域にどう活かすかが問われます。行動と結びつかない学びは意味がありません。地域を

知り、探究し、主体的に考える姿勢を育てることが、教育の使命です。

学校教育では知識の専門性だけでなく、態度や姿勢を育てることが重要です。これが社会や地域に貢献する人間になる基盤であり、現行の学習指導要領でも重視されています。求められるのは「生きて働く知識」と「未知の状況に対応できる力」です。大人になれば問題を発見し、解決策を考える力が必要です。教師は子どもに考えさせる素材や体験を提供し、専門家や地域資源を教育に取り入れることが求められます。

■道教大と開発局の連携が生み出す新しい教材と学び

今回、道教大と開発局が連携協定を結んだことは画期的です。過疎化が進む北海道では、地域の誇りをどう育てるかが課題です。道路や農業など「当たり前」に見えるものが、日本の食料や生活を支えている事実気づかせることが動機づけになります。身近なものに「なぜ？」を問い、仮説を立て、調べる探究活動が重要です。教師は教科横断的なカリキュラムを組み、地域体験を取り入れることで、子どもの関心を広げられます。

探究学習では、教科書と現実を結びつけることが鍵です。学んだ知識を地域や社会にどう活かすかを考えさせることが、自己肯定感や達成動機を高め、挑戦意欲につながります。外的動機だけでなく、内発的な探究心を育てることが成長の条件です。達成感を得た子どもは「次もやってみよう」と挑戦意欲を持ちます。逆に自己肯定感が低いと「どうせ無理」と諦めてしまいます。だからこそ、教師は子どもが成功体験を積めるよう支援し、探究心を伸ばすことが重要です。

地域課題の解決には、学校教育と地域社会の連携が不可欠です。公共機関や専門家を教育に取り込み、子どもが主体的に学び、地域に還元する力を育てることが次の学習指導要領の柱です。開発局の知見を教材化し、教育界が子どもに伝えることで、地域づくりと新しい教育が進みます。指示待ちではなく、自分で問題を立て、地域に関わる力が求められており、このことを学校教育に取り入れることが課題です。

最後に、教育関係者や開発局が連携して取り組めることになったのは、新しい段階の教育活動だと思います。その英知を教育界の人間が子どもたちに伝えることが必要であり、教育関係者と一緒に新しい教育、地域づくりを進めていきたいと思っています。

【発表】

「連携協定を活かして若手教師を育てる

～北海道に必要な未来の教師とは～

国立大学法人北海道教育大学釧路校講師 玉井 慎也 氏



次期学習指導要領の論点整理では、「深い学びの実装」、「多様性の包摂」、「実現可能性の確保」という3つのキーワードが示されています。最後にまとめとして、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の作り手をみんなで育む」とあります。私が注目したのは、「みんなで育む」という部分です。これまで学校の中で協力して進めてきたことを、地域の方や官公庁と協力して一緒に学校づくりや地域づくり進めることが求められていると感じています。今回の連携協定や覚書は、その第一歩です。

■地域とつながる学びのデザイン

私は、遠隔教育や地域教育を同僚や地域の方と協働してデザインできる先生を育てたいという思いで、4年間のカリキュラムを構成しています。1年生から地域に出て、フィールドワークやボランティアを体験します。弟子屈での植樹や阿寒の除雪ステーション見学などを通じて地域を理解し、教材づくりに挑戦する学生もいます。2年生ではZoomを使った遠隔交流学习をデザインし、模擬授業を実施。3年生は中学校と連携し、釧路湿原の課題をテーマに「持続可能な社会への参画」を促す学習を展開。4年生ではフィールドワークなどで得られた地域の教育資源を活用して地域探究用動画教材を制作します。地域と協働しながら探究的な学びを積み重ねています。

ここからは、学生による取組事例を紹介します。

学生発表（舟生 蒼子さん・4年）



私は釧路湿原をテーマに、開発と保全という問いを扱った動画を制作しました。動画の中では、釧路川の治水工事で湿原の保全活動を取り上げています。洪水を防ぐために川をまっすぐにした歴史と、その結果湿原が乾燥し、生態系が失われてしまった問題。この二つをどう両立させるかを問いとして投げかけました。

動画の工夫は、キャラクターを使って親しみやすくしたことです。子どもたちが難しいテーマでも楽しく見られるように、会話形式で進めました。例えば「暮らしを守る工夫」と「自然を元に戻す努力」という言葉を入れ、最後に「二つを両立させるために何ができるか」と問いかけています。

動画制作を通して強く感じたのは、専門家と協力することの大切さです。一人で作ると事実の羅列になりがちですが、専門家と協力して作る場合は「情報の解像度」と「熱量」が違います。専門家に学ぶことで、当時の人々の思いや背景まで知ることができます。地方には生きた教材がたくさんあります。それを発掘して、専門家と協力しながら学ぶことで、より深い授業を作れるのではないかと感じました。



学生発表（大戸 玲穂さん・3年）



私たちは釧路湿原をテーマに、遠隔授業をデザインしました。授業の導入では「推しの湿原」を挙げてもらい、そこから学習課題を立てます。テーマは「開発すべきか、保全すべきか」。まず自分の立場を決めてアンケートを取り、反対意見の人と意見交換。その後、開発局の専門家に旧河道復元の話を行いました。

印象的だったのは、工事期間が5年、費用が約9億円と聞いたときに、教室では驚きの声があがりました。数字の重みを知ると、考え方が変わります。保全は理想論ではなく、現実の課題と結びついていることを実感しました。



オンラインを使えば、北海道だけでなく全国の子どもたちとこういう学びができます。専門家と地域をつなぐ新しい教育の形だと思います。遠隔授業は、地域の課題を共有しながら、子どもたちが主体的に考える場を広げる可能性があると感じました。

■みんなで育む、社会と結びついた学びのあり方

学校教育で問われるのは知識だけでなく態度や姿勢です。生きて働く知識とは、未知の状況で問題を発見し、仮説を立て、行動につなげる力です。その動機づけは、身近な地域資源の再発見から始まります。道路や釧路湿原の歴史を知ること、誇りとアイデンティティが育ちます。道教大と開発局が連携することで、学びが社会と直結する仕組みを作れる。これが、みんなで育む教育だと思います。

【発表】

「まちづくりの視点から見える教育への期待

～開発局の熱い思いとは～

国土交通省北海道開発局開発監理部開発計画課

開発企画官 大泉 勝裕



北海道は国土の22%を占め、札幌と釧路の距離は東京と名古屋に例えられます。都市間距離は本州の2～3倍で、広大な農地と豊かな自然、海に囲まれた環境を持ち、日本の食料供給力（カロリーベース）の約24%を担っています。また、生乳やホタテ、小麦などは全国トップクラスの生産量です。これらを消費者に届けるために必要なのが人流と物流であり、その基盤を整備・管理するのが開発局です。開発局は河川、道路、港湾、農業基盤などのインフラ整備に加え、都市計画や官庁営繕など総合行政機能を担っています。

■産業を支えるインフラ整備と地域経済への波及効果

こうした産業を支えるインフラ整備は、地域経済の活性化に直結します。例えば昨年、道東自動車道が釧路西ICまで延伸されたことにより、釧路管内の工業団地の分譲済面積が増加し、釧路市では新たな工業団地の候補地として道東自動車道のIC付近が検討されています。さらに、観光客の来訪率も増加し、防災面では代替輸送に活用され、人流・物流の維持に貢献しました。インフラは産業を下支えする存在といえます。

■教育との連携が地域の未来を創る

では、なぜ開発局が教育に関与するのか。人口減少

で地域需要が縮む中、外需の拡大が必要で、それを支える供給力を維持するには人材育成が不可欠です。ここで参考になるのが「産業連関表」です。これは産業間のつながりを示すもので、農業や漁業、観光が活発になると、食品加工や宿泊業などに波及効果が広がり、地域経済全体が動きます。こうした構造を理解し、産業・インフラ・教育の三つが連動する仕組みをつくる必要があります。教育は産業やインフラに人材を供給します。産業やインフラを教材に取り入れることで、学生は地域を知り、誇りを持ちます。その誇りが文化の継承にもつながります。課題を共有し、学びを社会と結びつけることが重要です。アリストテレスの言葉を借りれば「全体は部分の総和を超える」。産業・インフラ・教育の三つの連携が新しい可能性を創造できると感じており、こうした考え方が、我々が教育と連携する理由です。

開発局では道路部門における「みち学習」などの取組を進めていますが、他部門も少しずつ関与していきます。今後さらに教育との連携を強化し、地域の未来を担う人材育成に貢献していきたいと考えています。

【パネルディスカッション】

「北海道だからこそできる教育の未来」

〈パネリスト〉

国立大学法人北海道教育大学特任教授

（前北海道教育大学副学長）

玉井 康之 氏

国立大学法人北海道教育大学釧路校講師

玉井 慎也 氏

国土交通省北海道開発局開発監理部開発計画課

開発企画官 大泉 勝裕

北海道教育大学釧路校学生

舟生 蒼子さん

大戸 玲穂さん

〈ファシリテーター〉

認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

理事長 新保 元康 氏

事務局長 宮川 愛由 氏



宮川 テーマは「北海道だからこそできる教育の未来」です。道教大と開発局の連携協定が、実際に若い先生方がこの地域に残って教育をしてもらうことを進める上での、生きがい・やりがい・働きがいとどうつながっていくのか。学生も交えて、本音でお話できる時間になりたいと思います。教育、まちづくり、インフラは切っ

でも切り離せないというのが皆さん共通の認識でした。一方で、忙しい中で地域の資源を使った教育は簡単ではありません。現場の声を伺いながら、この連携で何が変わるのかを考えていきたいと思っています。

■地域の魅力を教材に―現場で学ぶ学生の声

宮川 まずは、今回の地域学習・教材づくりの取組の背景と、感じた難しさを教えてください。

玉井（慎） 釧路校は道外出身の学生も多いので、北海道・道東のことをたくさん知ってもらい、地元に戻っても北海道のことも含め地域のことを教えてくれる先生になってほしいと思っています。また、北海道出身でも、赴任先が訪れたことのない地域ということもあります。入った地域のことをどう知るか、その魅力をどうカリキュラムにするかなど、学び方や教材研究の仕方を4年間で身につければ、地域教材を作れる先生になるはずだという期待を込めています。

大戸 大学入学を機に岡山から釧路に来ました。北海道を題材に教材を作るのは、知識が足りず難しい面もありましたが、開発局や外部の方々と連携できたことは大きな助けになりました。この経験は、将来教師になったときに子どもたちに役立つ教材づくりにつながると感じています。

舟生 私も大学入学をきっかけに山形から釧路に来ました。当初は釧路の場所すらよく分からず、釧路湿原についてもほんの少し聞いたことがある程度でした。今回の取組を通じて、実際に学ぶ機会を得られたことは大きな経験です。今後は、この学びを子どもたちにしっかり伝えていきたいと思っています。

玉井（慎） 舟生さんは2分半の動画を4時間かけて作りました。他の学生はパワーポイントをMP4にするだけで、だいたい1～2時間の課題でした。私からの指示は「釧路湿原に行って写真・動画を撮り、編集して子ども向け教材にする」というシンプルなもので

すが、自主的に手を加えて編集する学生も多く、十数本の動画ができました。こうした教材づくりにおいて難しいことは、現場での体験をどう活かすかという点です。ネットの情報や資料ではイメージは持てますが、専門家の話や現場で五感を使って学ぶことがフィールドワークの良さです。専門家に話を聞く、専門家しか持っていないデータに触れる、秋から冬に移る時期の寒さも含めて肌で感じる。単にネットで調べて教材化するより質の高い教材を作る力が身についたと思います。

新保 専門家に現場で教えてもらったことで、釧路湿原に対するイメージは変わりましたか？

大戸 湿原が広がっているというイメージしかなかったのですが、釧路川が直線化された歴史的背景や、蛇行に戻した理由を専門家に直接聞けて、大変勉強になりました。

舟生 「綺麗^{きれい}だな」という印象だけだったのが、直線を蛇行に戻した知識と、その時の願い・理由・情熱まで知ることができ、本当に学びになりました。

■現場での学びがもたらす変化と新しい教材の可能性

宮川 ここからは、北海道の教育を取り巻く大きな課題について触れたいと思います。道東ではピーク時から人口が半減するという深刻な状況があります。若い人が地域に残るためには、無理に留まるのではなく、自分らしく生きられ、やりがいを感じられる仕事が必要です。道教大と開発局の連携によって、地域資源を活かした教育がどのように変わっていくのか、その可能性を伺います。

玉井（康） 教育の出発点は“気づき”です。釧路市には、一つの市に二つの国立公園があるという全国でも珍しい特徴がありますが、こうした地域資源を教材として意識していないことが多いのです。例えば「道が広い」という風景一つにも、開拓の歴史や産業の必然が宿っています。しかし、先生方は日々忙しく、こうした素材を集めることは容易ではありません。だからこそ、専門家とつながることで、子どもたちに投げかける“面白い問い”が見つかります。それが今回の連携協定の大きな成果だと考えています。

大泉 地域の産業とインフラを結びつけた教材づくりができます。例えば、根釧地域は生乳の生産量が全国一ですが、その背景には物流の仕組みがあります。牛が食べる飼料の一部は海外から輸入されており、その輸送には港が欠かせません。釧路港は国際バルク戦略港湾に指定され、大型バルク船が入港できるよう整備



されています。こうした港と高規格道路、後背地の産業のつながりを、開発局の視点で示しながら、教材として提供できると考えています。

新保 パナマックスという言葉を知っていますか？パナマ運河を通過できるマックス（最大）サイズの船舶のことです。こうした大型船による大量輸送でコストが下がり、安全で美味しく、価格が安定した牛乳が食卓に届きます。一本の牛乳の中に、国際物流と地域産業がつながるドラマが北海道にある。こうした発見が、教師の「教える熱」につながっていくのだと思います。

■今後の展望と最後のひと言ー全員のまとめ

宮川 皆さんから熱い思いをいただきました。最後に、今日の対話を通じて感じたことや新たな気づきについて、一言ずついただければと思います。

玉井（慎） 「一本の牛乳から」という授業を構想しています。社会科で有名な「一本のバナナから」に倣い、地域と世界の関係を学ぶ教材を作りたいです。大学祭では開発局と連携したパネル展示も始めました。出前講座なども積極的に活用し、地域に出ていく学生を育てます。

玉井（康） 学習指導要領は法律で決められており、教科書をやめて地域のことをやりましたでは法令違反になります。地域の素材を扱う際は、どの単元・教科書のどこに置き換わるかの工夫が不可欠です。身近な学びは誇りを生み、社会参加・自己肯定感につながる。今回の協定は、地域素材と学校教育を結ぶ一つのきっかけになったと思います。

大泉 現場を見ることで情報の解像度が上がるだけでなく、職員の熱量まで感じてもらったのが嬉しかったですし、これを糧に、我々も一緒に取組を進めていきたいと思います。

舟生 今回の講義や対話を通じて、つながりの大切さを強く感じました。四年を過ごした北海道は離れます

が、得たつながりを大切にします。他の地域とのつながりも広げていきたいです。私がこの大学に進学した理由は積極的なものではなかったのですが、このようなつながりをいただけて、一切の後悔はありません。

大戸 大学・教育・地域インフラがつながっているからこそ、未来ある子どもたちの成長があると感じました。空港の教材づくりにも取り組んでいます。港湾や高速道路など、今まで見えていなかった視点が釧路には眠っていることが分かりました。残り一年、いただいたご縁をもとにいろいろなことに挑戦します。

新保 教材研究をすると、子どもが地域を好きになるだけでなく、教師自身も地域を好きになり、まちのために「何かしたい」という気持ちが生まれます。価値観を大切にしながら未来へ向け、今までにないタッグー開発局と教育現場ーを組んで広げていきたい。今回の協定はそのはじまりだと思っています。

【連携協定と学生・若手教員へのエール】

国立大学法人北海道教育大学釧路校キャンパス長

和地 輝仁 氏

今年9月、釧路校と釧路開建の間で覚書を交わし、地域課題を克服する教員や人材の育成、児童生徒向け教材の開発、防災教育、研究活動の推進など、具体的な取組を定めました。

既に釧路湿原でのフィールドワークや大学祭でのパネル展示など、協力の成果が現れています。さらに、釧路開建と連携した授業科目も立案中で、令和9年度に新設されるコースの必修科目として、地域課題に挑む実習を含む意欲的な内容になる予定です。短期間で持続可能な形を検討いただき、覚書の成果として大きな一歩となりました。

釧路校の卒業生の約75%は教員となり、その多くが道東で働きます。今の教員は教科を教えるだけでなく、地域との連携や地域貢献を求められる大変な職業です。また、学校という施設は地域の核となりますが、これは多様で豊かな地域社会の形成といった開発局の施策とも重なっています。若い先生方や学生の皆さんには、こうした味方がいることを心に留め、存分に自身の能力を発揮して、地域で活躍することを願っています。





座談会 「地域活動」と「地域プライド」 地域の今を支え、未来につなぐ

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

当協会では、北海道内の地域活性化活動に取り組む諸団体との「地域活動ネットワーク」構築を目指し、令和7年10月29日に札幌市内で、地域の活性化に向け活躍される方々にお集まりいただき、日々の活動で感じる「地域プライド」をテーマに座談会を行いました。



開会あいさつ（開発調査総合研究所）

本日は、地域活性化に取り組む方々にお集まりいただき、「地域プライド」をテーマにディスカッションを行います。北海道は過疎地域が多く、民間企業の力も弱いため、地域活性化のための非営利活動が益々重要になっています。多様な活動は個々に展開されていますが、「地域を良くしたい」という想いは共通であり、地域活動のネットワークが広がることで、今後、各活動団体が相互に刺激を受け合うことになれば喜ばしいと考えています。

本日のコーディネーターは、札幌市立大学デザイン学部准教授の片山めぐみ先生にお願いしております。よろしくお願いいたします。

片山 めぐみ（札幌市立大学デザイン学部准教授／社会福祉士／2級建築士／コーディネーター）



私は、臨時的に人とコミュニケーションをとりながら、「人や地域の潜在的な何かが花開く瞬間」をコーディネートするコミュニティデザインや、まちづくりを専門にしています。自身もNPO法人を立ち上げようとしており、地域活動を「自分ごと」として伝播^{でんぱ}させていかな

ければならない状態です。本日は皆様と同じ目線に立ち、お話しさせていただければと思います。

早速、自己紹介を兼ね、個々の取り組みと地域への想いについて、佐藤さんからお願いします。

【地域活性化に関わる取り組みと地域への想い】

佐藤 太紀(株式会社エフエムもえる代表取締役社長)



留萌に戻った当初、都市計画マスタープラン策定などの市民会議に参加しましたが、「あれが欲しい、これが欲しい」などの主張が多く、結局「行政が悪い」という縮図が目立ち、あまり発展を感じられませんでした。根本的な課題は、「地元の意識改革が必要」で、地域のことが「自分事化されていない」のではないかと気づきました。

そこで、自分が地域に関わっている「実感」を得る手段として、ラジオ局「エフエムもえる」をスタートしました。地域に何もないという人は、何も知らないことに気づいていない。人に伝える方法を与えることで、自分で気づきが得られ、まちづくりの一環として、主体意識を持った市民を一人でも増やす仕組みとして考え、30代前半のころにボランティアから始めています。

地域課題を明確化し、人の集まる場ができたことで、次に考えたのは「外からの評価」を得て、「お金をもらう」ことです。この二つの視点から観光に着目し、外部からの情報とお金をエンジンとして旅行会社を立ち上げました。この二つのエンジン（内部の情報循環／外部からの情報・お金）を掛け合わせることが、良いまちづくりにつながっています。現在は、全員が生産者として動くわけではないため、市民も含め地域の人にお金を使ってもらう「消費人口」を作ることにも取り組み、外からのお金を呼び込むため、観光だけでなく一次産業も含めた商品開発を進めています。

菊池 吉史(くしろ元町青年団団長)

釧路市の厳島神社で神主をする家系に生まれ、高校まで釧路で育ち、大学時代は東京に出て観光学を学ん

でいましたが、今は釧路に戻り神主をしています。

地元に戻った際、釧路は魅力があるものの、「地域に若者が半減」し、歩いていても若者は私しかいない状況でした。「自分がやらないと誰もやる人がいない」と勝手に燃え上がり、2015年に「くしろ元町青年団」を立ち上げ、現在は17名で活動しています。

活動の軸は、シビックプライドの醸成と、若い人たちが過ごしたくなるまちづくりです。活動は、健康とコミュニティづくりを兼ねた「ゆるラン」や、地域の方に案内してもらいまちを楽しむ「フットパス」を長年続けています。フットパスを通じて、地域住民も元気になってくるというメリットがありました。

元々、観光業への関心から、クルーズ船で来航する外国人向けに日本文化を伝える「神社仏閣ツアー」を行っています。また、「元町お寺食堂」を2か月に一度、お寺の大広間で「地域の居間」というコンセプトで運営し、子供100円、大人300円で食事を提供していて、毎回200～300人が集まります。参加する一人暮らしの高齢者が「ここが私の居場所だ」と言われるなど、元気の源にもなっています。

地域の課題として「地域の人々が地域の魅力を知らない」という点があり、まず元町MAPの作成を通じ、地域の方々に地域の魅力を知ってもらい、郷土愛を育むことに取り組んでいます。

坂本 純科(NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト理事長)

札幌市役所で公園の設計や工事の仕事に13年間携わり、使い手と一緒に設計したり、造ったりすることにモチベーションを感じ、子どもや高齢者、障がい者施設の方々と一緒にデザインをしていました。しかし、行政の仕事は所管ごとに対応が分かれ、高齢者や子どもたちの日常的な課題にアクセスできないと、限界を感じ、2004年に退職しました。

NPOの活動がなかなか自立せずに悩んでいた当時、ヨーロッパのエコビレッジを知りました。各地を訪問し、食、住まい、エネルギーなどを自給する暮らしを通じて社会課題を解決するコミュニティの価値に感銘を受けました。2009年から北海道で活動を始め16年になります。

エコビレッジが地域で生き残るには、自分たちだけ閉じるのではなく、「地域に信頼され貢献する」ことが不可欠だと考えました。初めのころは新興宗教と疑われたかもしれませんが、近所の農家の手伝い、道路の清掃、神社の草刈り、祭りの準備といった地域貢献を続けた結果、今では農業委員や町内会の役員を務めるまでに信頼を得ています。

出身地の本州でなく、北海道を選んだのは、エネルギーや食の自給がスケールの夢ではないこと、そして本州では文化やふるさは「守る」という要素が強いのに対し、北海道は「クリエートする伸びしろがあって、新しい人たちにも抵抗感が少ない」という文化的な特徴があったためです。

【活動を通じ発見した地域プライド】

片山 自身の活動や取り組みを通じ、発見した地域プライドについて、菊池さんからお願いします。

菊池 私たちが地域のランドマークと呼んでいる「弁天ヶ浜」には、石炭列車が94年間走っていましたが、2019年に廃止され、ある日突然、踏切と警報機もなくなりました。地域の高齢者から何とかして欲しいと言われ、モニュメントとして復活させるプロジェクトを立ち上げましたが、復元に100万円かかると言われ、クラウドファンディングではなく、地域の会社や個人から寄付を募り160万円ほど集まりました。

今は観光客も集まる「映えスポット」になっていますが、この経験から、誰かが旗振り役をやれば、多くの人から応援していただき、結果が伝播していくことを実感しました。募ったお金の一部を使い、テーマソング「つなぐ道」を制作しました。作曲は、釧路市の著名なジャズピアニスト木原健太郎さんをお願いしました。私たちの熱意が伝わり、毎日、弁天ヶ浜に通われインスピレーションを高めて作曲をされています。

地域の小学校で生徒たちに聴かせたところ、保護者が参加する中、少し大きな体育館で子どもたちが歌うことになり、地域の魅力が詰まった歌を子どもたちが

歌うのを聞いたとき、地域のプライドが醸成された瞬間だと感じました。この取り組みはNHKでも特集され、釧路市役所で朝のテーマソングとして流れています。

片山 ありがとうございます。では坂本さん。

坂本 余市町は、ニッカウキスキーはもちろん、最近^{にぎ}はワインで賑わっています。もっとも、高価なワインを喜んだり、イベントに参加したりするのは東京など都市部の人で、まだ地元のものになりきっていないという印象を持っています。理想的な観光は、「町民の楽しみや誇りをお裾分けする」スタイルにあるのではないのでしょうか。たくさんある魅力の中で、私は密かに「りんご」にプライドがあると思っています。明治から引き継ぐ伝統のりんごを農家と協力して増やし、お菓子に商品化しました。商品は、札幌の店舗と北大マルシェの2か所しか置いていません。ふるさと納税の返礼品にはなりません、リンゴ農家や地元の人が「地元の良いものを紹介してくれてありがとう」と感謝してくれたことに驚きました。町の人はどこにプライドを持っているのか、もう少し掘り下げてみないと分からないと感じています。

片山 エコビレッジでもワインを作られますか。

坂本 作っています。余市町は、ワイン特区の認定を取っているため、製造免許のハードルが低く、地域には小さなワイナリーが20軒以上あります。

片山 わかりました。続いて、佐藤さん。

佐藤 ラジオの立ち上げ時には、はじめ10人ほどのボランティアメンバーが集まりました。放送や運営を支えるボランティアパーソナリティは、今でも100人ほどいますが、「ボランティア」はタダということではなく、自由意志という意味で取り組んでいます。

やって良かったと思うのは、「成功体験」や「実感」を共有できたことです。自信なさ気にスタジオに入っても、番組が終わって、出てきたときにはとても誇らしい表情になります。自己実現と行動に裏付けされた自信だと思います。また今は亡くなれましたが、当時85歳のボランティアパーソナリティは、番組がない日も雑巾を洗って持ってきてくれて、「自分がここにいて、地域の一員だという実感」を得ていました。



観光体験でも農家さんが子どもたちを半日受け入れ、別れ際に涙ながらの交流が生まれ、子どもたちが「体験ができて良かった」と話すことで、農家さんが「我々のプライド」を実感します。

現在、道の駅の駅長も務めており、昨年は38.9万人のお客様と1.3億円の売上がありました。町の商店も「あそこなら稼げる」という希望を持ち始め、この「希望の伝播」が非常に重要だと感じています。

【地域活動においての重視されること】

片山 皆さんの取り組みもお互いに分かってきたところで、地域活動で重視されることを教えてください。

坂本 さまざまな人が多様な形で関われる「グラデーション的な仕組み」を大切にしています。また、夢のブレインストーミングで終わらず、「形になったものをみんなでシェアする」ことも重視しています。



地元住民とは、オーガニックや気候変動といった自分たちのテーマを押し付けず、共通の課題解決を通じて親しくなるようにしています。ゴミステーションのマナーや農業の担い手、祭りの運営といった共通課題と一緒に関わることで、時間をかけて信頼を得ることができました。

佐藤 いろいろな方と一緒に絡んで取り組むだけではなく、「その気になってもらう」ことが重要です。そのためには、感動体験や成功体験、希望など、いかに「それっぽく見せるか」を考えます。行動については、「とにかくやってみよう。やりながら考えましょう」という姿勢と、「飽きてもやる」という継続が大事です。

建設業の体質から大枠で物事を俯瞰する視点と、土質や天候など現場の状況で対応する、「やりながら考える」姿勢が身につけていると思います。

片山 建設業の良い所は、想定や計画はしますが、割と現場で変わります。やりながら考えることも大事かと思っています。次に菊池さんお願いします。

菊池 市民団体として、「自分たちが楽しそうに、ワクワクしながらやること」を大切にしています。楽し

そうに取り組むことで、周りの人から「何か手伝えることはないか」と興味を持っていただけます。

活動を持続させるため、核となる17名以外にも地域には「やりたい人」がいて、例えば、お寺食堂は「お寺食堂実行委員会」として、お寺や社会福祉協議会、地域包括支援センターなど、さまざまな団体を巻き込み、「みんながWIN-WINな感じ」になる仕組みを作りました。これにより自分たちの負担も減り、持続可能なイベントになっています。「やりたい人を巻き込める仕組み」をしっかりと作り上げることも重視しています。

【情報の発信】

片山 地域からの情報の発信にはどのように取り組んでいますか。

佐藤 「情報の受発信」と呼んでいますが、ボランティアのボランティアな気持ちで寄せ集めた地域情報を、皆さん自身が発信する構造です。

ラジオ以外の発信にはSNSはもちろん、「オールドメディア」も積極的に活用し、特に新聞や圏域ラジオはかなり効果を感じています。地元紙やNHK支局には、毎回投げ込みを行い、毎月2～3回は新聞に載るよう取り組んでいます。人は複数の情報源から聞くとそれが本当たとを感じるそうです。

ボランティアパーソナリティは、基本的に誰でも受け入れ、内容の検閲もしません。言ってみれば憲法による言論の自由です。ただ、喋ったことに対する責任や自分が振る舞ったことの言論に関しては「自分で責任を取る」ということをセットにしています。これも自分事化の一面だと捉えています。

市民ボランティアパーソナリティは、「自分も地域の一員だという実感」を尊重しています。プロアナウンサーではありませんから、そこに関する苦情には「その時間は他局をお聴きください」と答えています。

菊池 釧路全体の情報発信ではなく、「元町エリアと勝手に定めるエリア」に絞って発信することが、情報が刺さっている要因だと思っています。

イベントの情報発信では、「いかに参加ハードルを低くするか」を工夫し、SNSでは敬語を使わずカジュアルな言葉遣いを心がけ、「行ってみようか」と思え

る文章にしています。メッセージも「釧路全体を盛り上げるためにも、元町地域から釧路を盛り上げよう」と地域を絞ることで、元町と関係のない人も興味を持ち、「自分の地域でも真似したい」と人が集まるなど、絞る作戦がうまくいっています。

片山 元町地区は、釧路発祥の地（佐野碑園）があったり釧路地域の人にとって歴史的な地域ですね。

菊池 私が戻ってきたとき、釧路市が作った地図には元町エリアが描かれておらず、釧路発祥の地を誰も語れない状況でした。学校でも釧路発祥は、教えてくれません。釧路の魅力が元町エリアに詰まっています。

片山 目の付け所がいいと思います。

坂本 講座やイベントの周知は、FacebookやInstagramといったSNSがメインです。以前、たくさんの人に来て欲しいと思って、一般サイトに掲載した時期もありましたが、資源を節約する、ごみを出さない、というエコビレッジの価値観を共有してもらえないお客さんが増えたので、現在はコミュニティやオフグリッドに興味がある方に絞るよう心がけています。

また、地域のイベントは、SNSが届きづらいため、回覧板など「足を使う」、アナログの手段に頼ります。

【未来へつなぐ地域のプライド】

片山 次は、「未来へつなぐ地域のプライド」がテーマです。ご自身の地域への想いをお話してください。

菊池 未来へつなぐには、自分たちが「楽しそうに地域活動に取り組んでいる様子を若者に見てもらおう」ことが大切です。「地元って捨てたもんじゃない」と思ってもらえる形を見せることで、今後、若者が自分たちなりに楽しく地域を盛り上げるにはどうしたら良いかを考え行動を促すことで、釧路のまちが未来に続いていくと考えます。

釧路公立大学の学生から「くしろ元町青年団」を卒業論文のテーマにしたいと言われ、メンバー17名がヒアリングを受けました。釧路市元町の魅力について、景色や歴史などを洗い出し、「元町青年団の人たちが地域資源」と結論づけています。活動する姿を若者に見せることが、次世代にもつながると実感しています。

片山 自らが灯台になっていますね。次に坂本さん。

坂本 地域資源を地元の人たちだけで受け継ぐのは難

しいと考えており、「外から来る人たちとのやりとり」を重視しています。一方的にサービスや情報を提供するのではなく、外の若い力や情報を地元に戻元し、お互いに学び合うことが肝だと思っています。

地域資源を素材にしたプログラムを通じ、外の人が余市のファンとなり、リピーターや収穫ボランティアになるなど、半町民的な関わりが増えていくことが重要です。移住者を増やすだけでなく、都会の人たちが得意なことで貢献してもらい、「第2の故郷」として心の支えになる場所を持つ「共生」の形が、地方の小さな自治体の生き残る道かと感じています。

佐藤 まちづくり活動が拡大した今、志の高い人ばかりが相手ではありません。裾野を広く人と関わるために「楽しくお金を使ってもらおうという関わり方」も重要になっています。

一つの指標として、「地域へどのように投資を呼び込むか」。モンベルや新たなホテル建設といった投資（外貨）を呼び込むことで、雇用が生まれ、消費人口が増え、土地の資産価値が上がっていきます。これからの転換期には、「地域の資産価値」の向上と「住民機運の押し上げ」を両方やっていかなければなりません。「ここなら頑張れるという希望の伝播」がシビックプライドにつながります。

お金は単なるツールですが、地域を持続させるためには不可欠です。シビックプライドを保つためにもお金は必要であり、地域全体の価値が上がっていることを皆と共有していきたいと考えています。

また建設業は、公共投資という「外からの投資（外貨）」を呼び込み、同時に生活基盤や生産空間をつくることで「地域の資産価値を上げていく」役割を担っています。代々地域に根差し地域をよく知る建設業は、地方部経済の柱として重要と感じています。



片山 地域にお金を落とす意味での応援金みたいなことでシビックプライドが強まるとしたら、そこも循環の内のエンジンと外のエンジンの歯車が合わさることになりますね。

皆様からいろいろな話題が出たところで、お互いにご質問があればお話をください。

【意見交換】

佐藤 私は、道外には7年しか暮らしたことがありませんが、本州ご出身の立場から北海道は文化を作ることには抵抗がないと感じますか。

坂本 本州では先祖代々築いた伝統・文化は、そのまま保存すべきという感覚があり、なかなか変えることができません。北海道は、新しい文化をクリエートする伸びしろがあります。

片山 背負っているものもいろいろありますね。

坂本 北海道では「スクラップ・アンド・ビルド」するとも言われますが、地域の「古い方」の知識と歴史を尊重し、それを土台に新しい価値を築こうとする姿勢が成功の鍵です。エコビレッジでは、修学旅行生を受け入れています。地元の歴史や一次産業を教材に、現代の課題や未来の姿を描くワークショップを行っています。また、お弁当改革にも力を入れました。余市町は米も野菜も魚も肉も、ほとんどの食材が揃い、それだけの食の資源がありながら予算上、海外や他町村の冷凍食品を並べた700～800円のお弁当が一般的です。そこで、「学びの一環」として学校側に理解を求め、環境負荷や生産者の努力を伝える教育プログラムとして、オール地元食材・プラスチック不使用の「学びの弁当」（1,500円）を提案しました。食材に関わる背景を子どもたちに語ることで、机上のプログラムよりも圧倒的に強いメッセージが伝わっています。

また、幻のりんごの事例のように、地元住民が「当たり前」すぎて気づかない価値を、外から「褒め」、新しい形（お菓子）でフィードバックすることで、農家の方々の誇りや、りんごの歴史を調べるなどの探究心を呼び起こしました。この「外からの賞賛」が、地域が持つ潜在的な力を引き出す重要な機会となっています。

片山 道産子としてそういう軽やかさを感じつつ、逆に「故郷に錦」みたいな気持ちはあまりない。さっと

止めてしまえる。故郷があることが、苦しくても歯を食いしばって続けることにつながって、ある意味重いけれども自分の糧にはなりません。

佐藤 ラジオ局や旅行会社の設立の際は、親から反対されましたが、自社（建設業）にとって直接的な利益は少なくとも、「地域に新しい投資を呼び込む」仕事はできました。

片山 脈々と続く神社にとって、今回のことでファンができ、「故郷に錦」になっていませんか。

菊池 神主をするだけでなく、神社を町歩きのコースに入れたり、元町MAPに入れることで、関わりができ、プラスになると思います。MAPは英語バージョンを作ったことで、外国人も増えています。

佐藤 お寺と神社の関係はどうか。

菊池 お寺とは仲も良く、明治期に本州の各地域から移住した際、各宗派のお寺と神社が並びあって建てられています。今は、一緒に地域を盛り上げていこうとしていますし、地域づくりは神社もお寺も地域のためにやるべきことと思います。

佐藤 私より10歳ぐらい若いお寺の住職がいて、彼は留萌JC出身で、音楽合宿を全国から呼び込む取り組みで内閣府特命担当大臣賞を受賞しています。ときどき、まちづくりはお寺の仕事じゃないと冗談まじりにいうので、昔から神社仏閣は地域の中核で、あまねく民の魂を救うのが使命なわけだから、むしろ本分なのでは？と話しています。

【まとめ】

片山 仏教用語に自灯明^{じとうみょう}という、自ら灯となり民を率いるという言葉があります。前例がないことをするとき、自分が灯台になって住民も自分も引っ張っていく心意が必要ですね。

自分の思いと地域社会の目指すところを一致させてぶれさせないことが大事です。でもそれを真面目にならず、でも不真面目にもならず、両方を行ったり来たりしながら周囲を巻き込んでいくのが我々の技だと思いますが、ぜひそういうことを広げていきたいものです。改めて私もNPOの立ち上げ途中ですが、力づけられた感じがします。

本日は、長時間にわたりありがとうございました。

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて ―地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組み―

第7回

住まいと地域コミュニティ

(一財) 北海道開発協会開発調査総合研究所 所長 目黒 聖直

人の住まい方のカタチ

前号では、北海道マンション管理士会の菅野英雄会長に、マンションにおけるコミュニティの考え方を詳細に御執筆いただきました。本号では、マンションをも含む地域全体での住まいとコミュニティの関係を考えてみたいと思います。

そもそも、コミュニティのあり方に最も大きな影響を与えることのひとつが、人々の住まいの態様です。いくら地域での祭りやイベントを開催しようが、極端な話、各戸が互いに1キロも離れていては、確固たるコミュニティの形成など望みにくいでしょう。人間同士の助け合いは大切なことですが、日常生活の上でそうしていく上では、隣家とはごく近い距離にあった方がいいに決まっています。

ところが、現実には、都市部のマンションでは、隣家と壁を共有するほどに近接しているのに、よく「隣に誰が住んでいるのかもわからない」と言われます。これは、現代の生活が便利になり過ぎて、ご近所さんの助け合いが必要とされなくなったからでしょう。都市部なら、すぐ近所にコンビニがあって、そこに行けば生活に必要なものがいつでも好きなだけ手に入ります。ところが、少し前まではそれで何の不都合もなかったのですが、社会の高齢化が進み、高齢独居者も急増するに至っては、体力も落ちて誰かの助けが必要だけれどもそれを近所に頼ることはできない、というような事態も生じています。

元来、人間でも動物でも、集団でまとまって暮らすというのはとても合理的なことです。そうすれば、何よりも、困ったことを避けたり解決しやすくなったりできるからで

す。動物にとっては、他の動物から襲われたときに命を守ることが何よりも大切で、シマウマや他のアフリカの草食動物も群れをつくって、猛獣の襲来に備えます。一匹狼はすべて自分の力だけで生きていかないとはいませんが、群れをつくって一緒に生きていく方が、多くの場合、どの個体にとっても有利なのです。

人間の場合、文明化してからは、他の動物に襲われる心配は殆どなくなりましたが、今度は人間同士が敵味方になることになり、敵の来襲に備えるために固まって住むことが必要になりました。最たるものが中国にある福建土楼で、平べったい筒状等の建物の中に一つの村がすっぽり収まっているそうです。外壁に沿って、3～5階の住居群が配置され、内側にはグラウンドのように広場を設けて、そこで祭祀を行ったりすることもあったようです。外壁には小さな入口しかないことからわかるように、建物のこの形態は、盗賊の襲来に備えるためだったとのことなのです。



福建土楼

欧州などでは、街が城壁に囲まれていることが多くありました。パリ、ウィーン、コンスタンチノーブル（イスタンブール）などの城壁が有名ですが、中には、今日でもそれがそのまま残っている例（スペインのアビラなど）もあり、その中に人々の暮らしがあります。勿論、城壁も敵の襲来に備えるためのものであったわけで、人々の安全を確保するためには固まって暮らすことが必要だったのです。

戦後の日本、そして北海道のまちづくりと今後

城壁のような明確な街の外縁がなかった日本では、自動車社会の進展に合わせて、建物を建てるための用地を求めて市街地が郊外へ拡大していったものの、街中の再利用があまり進まずに、スポンジ化した無駄に広い市街地が各地に出現しました。それは、都市部に限りません。郊外の集落でも、住宅が互いに遠く離れ、広く散在して、どこが集落の中心なのかさえ判然としなくなりつつあるような例がたくさんあります。これでは、特に北海道では、たった一軒のために長い道路を除雪しなければならなかったりして行政コストの面からも決していいことはありません。と、すれば、今後の人々の住まい方の方向性は明らかです。



シャッターの降りた建物と建物がなくなった空き地が交互する様子（道内某市）

街の大小を問わず、中心部に固まって住むための集合住宅をつくり、子育て世代などのための戸建て住宅はその周囲に配置する、その上で、戸建て住宅に住んでいた人たちも、子どもが独立してしまえば、管理が大変な戸建て住宅から集合住宅に移って暮らす、というパターンが好ましい、ということです。

事実、計画的につくられた住宅地である札幌市のあいの里や特に森林公園は、JRの駅を囲む集合住宅の周りに戸建て住宅が広がっています。今後は、札幌以外の都市部だけでなく、小さな市町村においても、そのような方向にもっていききたいものです。

ところが、ここで、集合住宅（マンション）では、誰もが隣家に無関心で、そのために孤独死などの問題も発生しているのではないかと、という問題が出てきます。これは、先述のように、従来は人々がプライバシーの確保に重点を置き過ぎていた結果と言えます。既存のマンションでは、前号で菅野会長が指摘したようにそこでのコミュニティを強化することが大切ですが、一方で、これからの建物には新しい発想が必要になってきます。

住まいとコミュニティ

その一つの考え方が、スウェーデン発祥のコレクティブハウスです。これは、各戸が完全に独立した形態を持ちながらも、別に共同の居間や食堂があり、時々居住者全員が集まって、食事会やイベントを開催するというものです。日本でも、有名な「かんかん森」（東京都）などいくつかの実例があり、レポートを読むと、40代の独身女性が、同じ建物に住む子どもたちの面倒をみながら共有スペースで休日を過ごして、自分がこんな小さな子どもたちと親しく接する日が来るとは夢にも思わなかったとしみじみと感想を述べるなど、温かい雰囲気が流れていることがわかります。ただ、日本全体としては、未だにそれほど普及しているとは言えませんし、北海道でも同様のコンセプトを持った公営住宅が釧路町につくられていますが、その後、他の市町村に広まっているという状況にはないようです。

コレクティブハウスは、建物をそれらしくつくればよいというだけでなく、建物内の人間関係がうまく管理されていかななくてはならないので、その難しさが原因となっているのかもしれませんが。新規入居者を迎える場合に、面談をして、ほかの入居者とうまくやっていけそうかをよくよく確認している、という例もあると聞いたことがあります。

しかし、そんなに複雑に考えることもないのではないのでしょうか。

私事になりますが、筆者の母は、晩年を高齢者向けマンションで過ごしました。そこは、一般のいわゆるサ高住とは異なり、ケアのサービスはあまりありません。その代わり、ホテルのシングルルームのようで、大抵はキッチンもないサ高住と違い、1LDKか2LDKの普通の住居になっています。一般のマンションとの違いは、室内のあちこちに緊急ボタンがあるほか、室内で倒れて長時間動きがないとセンサーで通報される、一定回数以上の食事を大食堂にて居住者全員でとる（食堂に現れることが安全確認になる）、居室の浴槽のほかに共同大浴場もある、といったことくらいです。しかし、食事を一緒にすることで、入居者同士が顔見知りになり、いつも皆でお喋りしやべをしているほか、腰の悪かった母が街中に行くときに、他の入居者が同行してくれたり、簡単な買物は代わりにしてくれたりしていました。

この施設では、食事は業者がつくっていますが、もしもこれを入居者が交代でつくるようになれば、もうそれは殆ど完全にコレクティブハウスです。事実、スウェーデンには、全世代が入居する一般的なコレクティブハウスのほか、高齢者だけが住むコレクティブハウもあります。

この例を見てもわかるように、人々が固まって住めば、ワークショップとかサロンとか、人々を結びつけるための仕掛けを一生懸命になって考えなくても、自然と助け合うようになるのです。かつての公共事業批判と結びついて、今の世の中はハードよりソフトが大切と考えられる雰囲気があって、信仰のようになっている印象すら

あります。そうでなくても、ハードを造り替えるとなると多額な費用が必要になるので、そこで思考停止してしまって、現状の姿を所与のものとして、その下でソフト的な対応によりコミュニティを強化しようと様々な取り組みがなされている、という状況があります。勿論、そうした取り組みを否定するものではありませんが、実のところ、ハードをしっかり和組み立てることで、ソフト的な対応はとても簡単になるのです。人々が助け合って生活していくためには、集まって一緒に住まうと便利、この当たり前の事実を現実のものにしていく努力が求められます。

これからの北海道のまちづくり

こうした集まって住まうということを実現した例としては、下川町の一の橋バイオビレッジがあります。ここでは、住居やそのほかの建物が屋内型の通路で繋つながっていて、雪の日でも快適に行き来できます。

さきほど、福建土楼は、盗賊の襲来に備えて一つの



一の橋バイオビレッジの全貌と屋内型の通路（下川町提供）

建物の中に籠もった、という話をしました。北海道で、盗賊に代わる大敵はなんでしょう。いうまでもなく、厳しい寒さと吹雪です。集合住宅やそのほかの街中の建物が、外気から遮断された通路で結ばれていれば、厳冬期でも凍えることなく移動できます。だからこそ、最近の札幌では、話題を呼んだ新さっぽろのアクティブリンク（^だ楕円形の通路）のほか、琴似駅や苗穂駅周辺などいろいろなところで屋内型の空中歩廊がつくられています。

アメリカのミネアポリスでは、集合住宅を含む中心街の多数のビル同士を空中で結ぶ屋内型の通路が張り巡らされていて、スカイウェイと呼ばれています。総延長は15キロ超（Wikipedia英語版2025年11月4日閲覧）にも及び、寒さで有名なこの地でも凍えることなく移動できます。カナダのカルガリーなどでも同様の通路を見ることができるそうです。

建物同士を結ぶこうした通路は、当然建物同士の距離が近い方が簡単に設置できます。その意味でも、建物を街中に集約し、近接させることが大切です。二つの建物が通路で結ばれたら、それによって一つの大きな建物になるともいえます。そして、行き来が便利になれば、それだけ人々の交流も増えます。

しかし、建物間を空中歩廊などの通路で繋ごうとすると、建物群の中に空き家や低利用の建物があると、それが邪魔になってしまいます。その意味では、空き家

の管理も問題です。これまでは、街中の一部を空き家が占めたりして、そのために街中ではまとまった土地が確保できなくて、公共施設などを市街地の周縁部に建設した、という例も少なくなかったと思います。しかし、それが、先述した街中のスポンジ化を促進してしまうのです。

我が国では、長年、歩いて暮らせるまちづくりとかウォーカブルなまちづくりとかいったことが言われ、今日では世界的にもバリの15ミニッツシティ構想など、いわゆるコンパクトシティに関連した運動が盛んです。ウォーカブルになれば、自動車によるCO₂も減少するなど、いいことはたくさんあります。街中なり集落の中心部なりへの建物の集約化とその中での集合住宅のコレクティブハウス化などの工夫、空き家の適切な管理、そうしたことによって、ウォーカブルでもある快適な暮らしのためのハードが整えば、特に中小都市や町村においては、コミュニティの活性化にも大きな効果が期待できます。

北海道で進む人口減少は、残念ながらすぐには止まりそうもありません。そして、たとえば、人口がかつての半分になったら、市街地の広さも半分で済むはずですが、実際には昔のままで、その分、市街地内に空き家・空きビルが増えてスポンジ化しているというのが、市町村の大小を問わず、殆どの市街地に見られる状況です。長期的視野から少しずつでいいので（というか、短期間に解決できる問題ではないので）、その改善を図り、これまで説明したようなウォーカブル化に向けて、市街地の再生を進めていきたいものです。

（参考文献）

- ・「第3の住まいコレクティブハウジングの全て」小谷部育子他編著 エクスナレッジ2012年
- ・「これがコレクティブハウスだ」コレクティブハウスかんかん森居住者組合森の風編 ドメス出版2014年
- ・「都市まちづくり学入門」日本都市計画学会関西支部新しい都市計画教程研究会編 学芸出版社2011年
- ・「都市計画」（第2版）谷口守 森北出版2023年



新潟県長岡駅前の空中歩廊

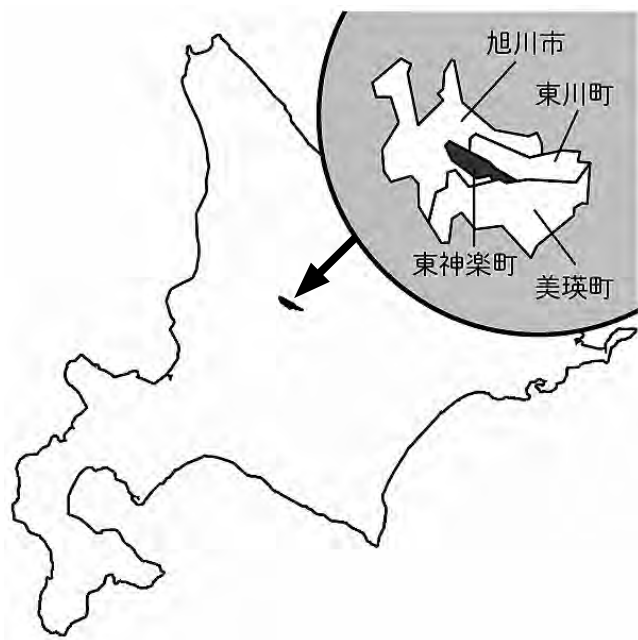
第3期東神楽町地方版総合戦略

東神楽町役場まちづくり推進課

はじめに

東神楽町は北海道の中央部、大雪山連峰の麓に位置し道北の玄関である旭川空港に近接する、面積68.5km²、人口約9,668人（2025年10月末現在）のまちです。肥沃な土壌を生かした農業が盛んで、稲作や野菜の生産が主要な産業となっています。町内には工業団地が整備されており、食品加工や木工などの製造業も展開されています。また、ひじり野地区を中心に計画的な宅地開発を進め、隣接自治体からの移住者を受け入れました。住宅地と農地を分離した用途分離型の都市構造を採用し、効率的な土地利用を図っています。

さらに、東神楽町は「花のまち」としての歴史があり、住民主体の環境美化活動から始まった花のまちづくりを行政と協働で継承・発展させています。人口に占める子どもの割合は北海道内でもトップクラスを維持しており、子育て支援策の充実にも力を入れながら「子育てNo.1のまち」を目指しています。



複合施設はなのわ

人口の推移

本町は、旭川市中心部から車で25分、旭川空港から10分ほどという優れた交通利便性も備え、平成元年から始まった大規模な住宅地開発により、近隣市町村などから子育て世代を中心に転入者が増加しました。

こうした背景のもと、東神楽町は1970年代後半以降、一貫して人口が増加してきました。特に宅地開発により、2000年に人口8,000人、2013年には10,000人を突破し、2015年の国勢調査では前回比+10.1%という全道第1位の人口増加率を記録しています。人口構成をみると0～14歳の年少人口割合が15.7%と高く、65歳以上老年人口割合は25%程度と低い点が特徴的です。

しかしながら、近年の人口の推移をみると、2016年12月に10,400人を超えたのをピークに人口は減少に転じ、2020年の国勢調査における人口は10,127人、2025年11月には9,668人となっています。

また、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という）の人口推計では2040（令和22）年が9,124

人、2050（令和32）年が8,289人にまで減少するとされました。

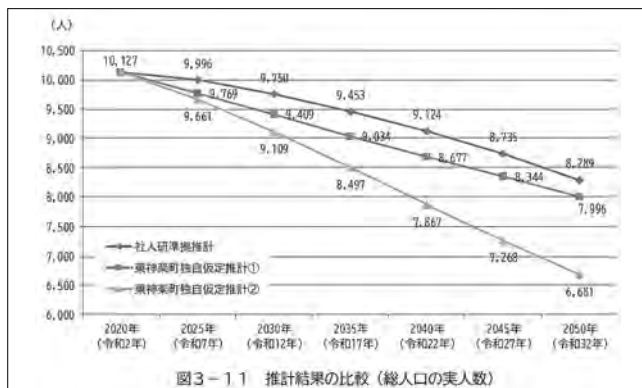


図3-1-1 推計結果の比較（総人口の推定数）

人口推移（東神楽町人口ビジョンより）

東神楽町地方版総合戦略の概要

第3期東神楽町地方版総合戦略では、第2期戦略の成果と課題を検証し、国の第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」や「デジタル田園都市国家構想総合戦略」、町の第9次総合計画や地区別まちづくり計画との整合を図りながら見直しを進めました。町の強みである「花のまち」や「住み続けたいまち」の理念を活かしつつ、人口ビジョンに掲げた9,500人の人口維持目標を基軸に、Society5.0、ゼロカーボン、デジタル化といった新たな社会潮流に対応した持続可能な取り組みの方向性を整理しました。これまでの枠組みを継承しつつ、それぞれの基本目標のもとで少子高齢化や人口減少、新たな課題や社会情勢の変化に対応できるように見直しを行いました。

基本目標と具体的な施策

【基本目標1】 地方にしごとをつくり、安定した雇用の創出と未来を担う人材育成

地域の特性を活かした地場産業の振興や雇用機会の創出を進めるとともに、担い手不足に対応するため、町内外からの人材確保と育成に取り組みます。教育環境の充実やキャリア形成支援を通じて、若者が町内で安定して働ける仕組みを整え、地域を支える経済基盤の強化を図ります。

〇具体的な施策

東神楽町マチのにぎわい創出支援事業

東神楽町では、地域のにぎわいと持続可能なまちづくりを進めるため、町内での新たな事業展開を後押しする「マチのにぎわい創出支援事業」を実施しています。対象は、町内で創業を予定している方、既存事業者による第二創業や2号店出店を計画している方などで、地域資源を積極的に活用し、新たな雇用の創出が見込まれる場合に、事務所や店舗の設置などにかかる費用の一部を補助します。

地域内で新たな挑戦に取り組もうとする事業者の背中を押す仕組みとして、町の産業や雇用の活性化につなげていくことを目指しています。

ポスターには「東神楽町 マチのにぎわい創出事業」のタイトルがあり、イラストには「SHOP」の看板と人物が描かれています。右側には「町の地場産業を活用した新規創業等を考えている方を応援します!!」と記載されています。下部には「補助金最大200万円」という大きな文字があり、その下に「東神楽町では、町内で生産された農産物等を活用して、新規創業や第二創業、2号店等の出店をする方に対して、補助金を交付します。」と説明されています。さらに「※東神楽町以外に在住する方も、補助の対象としています。」と注釈が付けられています。

補助対象となる業種	申請方法
①飲食業 ②小売業 ③宿泊業（民宿を除く） ※ 農業関係は専業農家と認定される農家のみ対象。兼業農家は対象外です。	東神楽町Hに掲載の申請書に必要事項を記入し、新設場 産業振興課へ郵送又は直接お持ちください。
補助金の額 -補助対象経費の2分の1以内 -200万円上限 (応募者多数の場合、審査の上、削減する場合があります)	お電話にお問い合わせてください 〒071-1522 北海道十勝郡東神楽町南1条西1丁目3番2号 東神楽町役場 産業振興課 (0166) 83-2114
相談及び申請期間 ①相談期間 令和7年4月1日（水）～令和7年12月30日（水） ②申請期間 令和8年1月6日（水）～令和8年1月31日（金）	

【基本目標2】 地方への新しい人の流れを生み出す

「住みたい、住み続けたい」と思われるまちづくりを進め、交流・関係人口の増加を図ります。旭川空港を活用した観光振興や人材流入を促進するとともに、「花のまち」の魅力を活かした取り組みや住環境の整備により、移住・定住希望者の受け入れ環境を整備し

ます。また、テレワークやワーケーションを活用した新たな働き方の提案にも取り組みます。

○具体的な施策

東神楽町「住まいの輪」促進事業

東神楽町では、町内にある既存住宅の利活用を促進し、将来的な空き家の増加に備えるとともに、移住希望者の受け入れ体制を整えることを目的に、「未来につなげる『住まいの輪』促進事業」に取り組んでいます。

この事業では、既存住宅を良質な住宅ストックとして再生・活用しながら、特に子育て世帯や高齢者世帯にとって安心して暮らせる住環境の整備を支援します。こうした住まいづくりの推進を通じて、将来推計人口の維持や地域定住の促進を図り、誰もが暮らし続けたいと思えるまちの実現を目指しています。



事業の内容	補助金額
①ZEH水準工事・省エネ基準化工事 外壁の断熱工事や、断熱性能の高い窓に切りかえるなどの工事が対象です。	断熱性をよくしたら 最大補助額 170万円
②バリアフリー化工事 介護してくれる人にもやさしい 住宅になってほしいわ	手摺などを設置したら 最大補助額 30万円
③耐震改修工事 耐震改修で安心	耐震性をよくしたら 最大補助額 50万円
④中古住宅の流通円滑化支援 売れてよかった 買ってよかった	住宅の売買をしたら 最大補助額 売主に5万円分 買主に1.5万円分
⑤住宅建替え支援 建替える場合、古い住宅の解体費補助	建替えをしたら 最大補助額 30万円
⑥省エネ機器支援 環境問題を考えよう	設置工事をしたら 最大補助額 50万円

※上記①～④及び⑥の制度は併用して利用可能
さらに！中古住宅の購入資金に【フラット35】を利用する方は、5年間の金利優遇措置（△0.25%）を受けられる場合があります。

【基本目標3】 地域で取り組む出産・子育て・教育の推進と誰もが活躍できるまちづくり

妊娠期から子育て期さらには、学校教育までの切れ目ない支援体制を整え、地域全体で子育てを支える仕

組みを強化します。あわせて、女性・高齢者・障がい者・外国人など多様な人々が活躍できる環境を整備し、多世代交流や生涯学習の場づくりを推進します。誰もが居場所と役割を持ち、安心して暮らせるまちづくりを進め、地域の連携と支え合いを深めます。

○具体的な施策

子育て世帯の経済的負担の軽減

東神楽町では、高校生までの医療費無償化や小中学生の給食費の無償化を実施し、子育て家庭の経済的負担を軽減し、安心して子どもを産み育てられる環境づくりを進めています。

こうした取り組みを通じて、子育て世帯の定住促進と将来の人口維持を見据えた、持続可能なまちづくりを目指しています。

【基本目標4】 安心して暮らせる環境を守り、地域間をつなぐまちづくり

防災・医療・福祉・子育て支援の充実や、交通・インフラ整備による移動の利便性向上を通じて、誰もが暮らしやすい地域づくりを進めます。「まちの駅」などの交流拠点整備に加え、ICTを活用した健康管理や地域サービスの充実により「スマートウェルネスシティ」の実現を目指します。歩いて暮らせるまちづくりや、近隣自治体との広域連携も推進します。

○具体的な施策

ひがしかぐら健康くらぶ

東神楽町では、健康寿命の延伸と介護予防の推進を目的に、町民が主体的に健康づくりに取り組む仕組みとして「ひがしかぐら健康くらぶ」を展開しています。この取り組みは、運動・栄養・社会参加を柱に、年代を問わず誰もが無理なく継続できる健康活動を支援するものです。

ひがしかぐら健康くらぶに登録した町民には、ウォーキングや体操などの運動教室、健康講座、フレイル予防活動への参加機会が提供され、日常生活の中で楽し

く健康づくりができる環境を整えています。特に健康ポイント制度を活用することで、参加意欲の向上や継続的な行動変容にもつながっており、町民同士の交流や生きがいづくりの場としても機能しています。

これらの取り組みは、町が進める「スマートウェルネスシティ」や「ウォーカブルシティ」の実現とも連動しており、歩いて暮らせる健康的なまちづくりの基盤として、今後さらに発展が期待されます。



【基本目標 5】 デジタルとゼロカーボンを軸に、持続可能な地域づくり

脱炭素社会の実現に向け、再生可能エネルギーの活用や省エネルギー施設の整備を進め、太陽光発電設備やEV導入などを通じて環境負荷の軽減を図ります。住民・事業者と連携し、環境意識の向上にも取り組みます。DX推進では、行政サービスの効率化やオンライン化により住民の利便性を高め、情報提供や教育を通じて行動変容を促しながら、持続可能な地域社会の実現を目指します。

○具体的な施策

東神楽町「ゼロカーボンシティ宣言」

地球温暖化問題は、その予想される影響の大きさや深刻さから、国際的にも最も重要な環境問題の一つとされており、エネルギー政策の転換や、防災・減災に向けた気候変動適応施策の実行など、豊かな環境を次世代へ継承できる持続可能な社会の形成に向け、具体的な行動が強く求められています。

近年、本町では、2050年までに東神楽町内域における温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す「東神楽町ゼロカーボンシティ宣言」（令和4年（2022年）3月）を行い、東神楽町地球温暖化対策実行計画に基づき、各種環境施策に取り組んでいます。

今後とも、ゼロカーボンシティの実現に向け、太陽光発電など再生可能エネルギーの有効活用や、地域GX施策の推進など、自然環境を保全しつつ、多面的な環境・エネルギー関連施策を町民との協働をもとに推進していく必要があります。



おわりに

本町では、第3期地方版総合戦略の基本目標に沿って、地域の特性を最大限に活かしながら、町の将来を見据えた持続可能なまちづくりを進めてまいります。

地場産業の振興や担い手の育成、子育て支援や教育環境の充実、医療・福祉体制の強化、防災や生活インフラの整備といった、住民の暮らしに密接に関わる分野の施策に加え、Society5.0やデジタル化、ゼロカーボンなどの新たな社会潮流にも対応していきます。

また、町民一人ひとりが安心して暮らし、互いに支え合える地域社会の実現を目指し、地域団体や関係機関との連携のもと、分野横断的な取り組みを展開してまいります。今後も町の魅力や強みを活かしながら、世代を超えて住み続けたいくなる幸福度の高いまちの実現に向けて、全力で取り組んでまいります。

ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第6話

「宗谷」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 新学部設置準備室 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池協会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議 全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は豊かな海幸に恵まれ、宗谷管内の中心である水産都市稚内と最北の離島礼文、利尻をご紹介します。礼文島や利尻島は離島振興法に基づき、天売島・焼尻島および奥尻島などとともに、離島地域の指定を受けています。大学時代、東北で実施されたワンダーフォーゲル部の合宿解散後、東京の自宅から集結地に送った80Lのアタックザックにテント、コッヘル（鍋セット）、お米や衣類など衣食住のすべてを詰め込み、JR周遊券を片手に北海道を17泊18日で旅しました。その旅の中で、最も印象に残ったのが今回ご紹介する北宗谷の礼文島、利尻島と稚内です。北海道一周の旅では、稚内、網走、釧路、札幌駅などで飯を炊き、駅舎軒下で寝袋に包まり野宿しました。歩み行く先々で人情に触れる中、最も印象的だったのは礼文島久種湖キャンプ場で、懐深き漁師さんの豪快でありながら温かいもてなしを受け感動したことが、東京から北海道移住を志すきっかけとなり今日に至っています。

今回ご紹介する北宗谷は、宗谷海峡をはさんで北にサハリンを望み、東はオホーツク海、西は日本海に面し、二つの海域の交わりにより豊かな漁場が育まれ豊富な魚種や海藻が水揚げされています。北海道の最北端、宗谷岬を中心に収穫される昆布を「利尻昆布」といいます。その利尻昆布の中でも、礼文や利尻で収穫される昆布を「島物」、稚内を中心に日本海側の留萌からオホーツク海の紋別までの海域で収穫された昆布を「地方」といいます。品質は島物の方が格段に上といわれ

ますが、その担い手である漁師の方々の高齢化かつ減少により、収穫量が年々減少しています。

北宗谷では漁業を基幹産業とし、そのもとで営まれる各種水産加工業や、その海幸を生かした「食」の魅力と礼文島・利尻島に咲く可憐で優美な趣の稀少な高山植物や奇岩の鑑賞、名峰登山など自然資源を組み合わせた観光業も主要産業の一つです。近年、アドベンチャーとトラベルを組み合わせた体験観光（AT）も盛んに行われるようになってきています。

宗谷の漁業の歴史を紐解く邸宅

稚内には街中に、1952（昭和27）年に漁業の親方瀬戸常蔵氏の邸宅として建設された、市内初の国登録有形文化財「旧瀬戸邸」があります。和洋折衷建築の贅を尽くした建屋には、42畳もの大広間や茶室、螺鈿をはじめ高価な調度品と庭園鑑賞や展示品などがあり、見学を通じて1950年代における底曳漁業の隆盛を理解し、稚内が沖合底曳漁業の前線基地として栄え、活気に満ち溢れた港の歴史を紐解くことができます。



稚内漁業の歴史を伝える 国登録有形文化財 「旧瀬戸邸」

国境のまち稚内で味わう最北の海幸

わが国最北のまち稚内では、2012（平成24）年に「稚内ブランド」が誕生しました。稚内の豊かな自然の中で生まれた水産物や農畜産物と、これらの資源を活かして生産される各種加工品や、稚内が誇る文化・自然などの地域資源を「稚内ブランド」として認定し、現在、原材料7品、加工品27品、地域資源4点が登録されています。これらのブランド品の魅力や独自性を国内外へ広く発信することを通じ、稚内の知名度をアップさせるとともに地域の活性化を企図しています。

現地取材の折、稚内市水産商工課や北海道宗谷総合振興局で教えていただいた「宗谷のもずく」と、かねてより関心あった「勇知いも」を実際に食べました。突風が吹き荒ぶ宗谷岬を再訪し、岬近くの食堂最北端でもずくがごっそり載ったラーメンをいただき、これまで食べたもずくとは全く食感と食味が異なり、初めていただく菌応えで独特な美味しさでした。年明けには、限られた時季にだけ採れる銀杏草もあります。

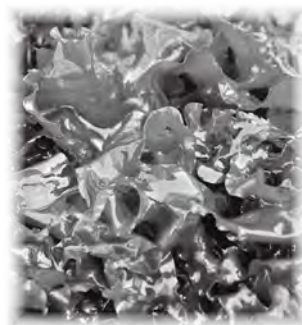
「勇知いも」は稚内市街地の南西20kmに位置する勇知地区で、安心・安全な環境のもとクリーン栽培されるジャガイモで、2015（平成27）年に地域団体商標に登録されています。冬期間、雪氷貯蔵施設で保管された勇知いもは、春には果物並みの糖度となる甘味が特徴で、飲食店や菓子店などから注目を集めており、姉妹都市札幌市との連携で焼酎も蒸溜されています。勇知いもの産地の上勇知には、酪農地帯の草原で名峰利尻山を借景にゆっくり寛げる素敵なカフェもあります。

まちなかの地元で愛されるレストラン「ら・せーぬ」では、仏パリの三つ星レストランで副料理長の経歴をもつ加藤隆士シェフが腕を振るい、宗谷の海幸をふんだんに使う本格的な仏料理を肩肘張らず美味しくいただけます、宗谷の海幸満載の「ブイヤベース」は絶品です！



稚内ブランド認定マーク

（写真提供：稚内ブランド推進協議会）



稚内銀杏草



宗谷岬、食堂最北端「宗谷のもずくラーメン」



勇知いものスイーツ
オレンジエッグ「ポテマルコ」



南稚内 キッチン倶楽部 菜好
勇知いもの「ポテトフライ」



最北のフレンチ ら・せーぬ 「店舗外観、ブイヤベース」



稚内上勇知 「Café Kiraから望む 名峰利尻山」



利尻島の財で地域を盛り上げる新たな息吹

利尻島では漁業および水産加工業を基幹産業として、昆布、雲丹、ホッケをはじめ多様な魚種や海藻の水揚げがあります。一方、少子高齢化が進みこうした基幹産業の人財を確保すべく、利尻富士町、利尻町および利尻漁業協同組合の連携により、漁業体験研修制度「漁師道!」を設け、島外、異業種に門戸を広げ漁業就業希望者を受入れ、担い手育成に取り組んでいます。

さらに、2018(平成30)年5月若手漁師らが利尻島の漁業の魅力を発信し、担い手確保や観光との連携による島の活性化を目指す団体「NORTH FLAGGERS」(代表 小坂善一氏)を立ち上げました。小坂氏は漁業の傍ら高級宿泊施設の運営を通じて6次産業化にも取り組み、隣接する最北のウイスキー蒸留所「カムイウスキー」とも連携し、島の新たな魅力創出に取り組んでいます。

杓形には、観光シーズンになると長い行列ができる人気のラーメン店「利尻らーめん味楽」があります。同店では、利尻昆布でじっくり出汁を引いたスープをベースに、中華鍋で醤油を焦がし、香ばしさを引き立つラーメンを看板メニューとしています。2012(平成24)年発行『ミシュランガイド北海道特別版』でビブグルマンに紹介されたことをきっかけに、全国からその味を求めるファンも多く来島しています。17(同29)年3月には新横浜ラーメン博物館へ出店、22(令和4)年9月に太平洋を渡り米国ボストンにポップアップストア出店、24(同6)年9月には常設店出店などに進化を続けています。

清澄な出汁を好む京都では、料亭、割烹はじめ多くの飲食店で、煮物碗はじめ各種料理で利尻昆布が最も多く利用されています。京都の酒処の伏見で老舗昆布屋が営む「おこぶ北清」では、お出汁に、昆布メや各種一品料理にと、利尻昆布の存在が欠かせません。



杓形 天日干しで琥珀色に焼めく「利尻昆布」



利尻島 若手漁師らによる団体「NORTH FLAGGERS」



杓形 利尻らーめん味楽「焼きしょうゆらーめん」



京都伏見 おこぶ北清「銘酒 富翁と昆布めしたおぼんざい」



稚内より利尻へ向かう船上から望む「名峰利尻山」

「花の浮島」 礼文島でうま味の聖地巡礼と花巡り

礼文島も漁業、水産加工業を基幹産業としており、とりわけ香深産の昆布は京都の料亭や割烹で重宝されます。利尻昆布は、京料理のはんなりとした味わいを引き出すことに力を発揮し、各種料理に欠かせない存在といわれています。良質な昆布を食べ育った雲丹も、非常に繊細で上品な味わいです。秋が深まると京都人がこよなく愛する京都三大漬物「千枚漬」が漬物屋の店頭に並びます。老舗漬物屋の村上重本店では、蕪の漬物樽に利尻昆布が惜しみなくふんだんに使われ、美味しい「千枚漬」が誕生します。北海道の昆布は、年始の鏡餅や飾り物での利用を通じ日本の伝統文化を支え、食卓での「食」を通じて多くの縁を紡ぎます。

また、礼文島では5月頃から高山植物を代表する「レブンアツモリソウ」をはじめ、優美で稀少な高山植物が300種以上も咲き誇り、島を訪れる人々を魅了し「花の浮島」と呼ばれています。札幌の移住当初、北海道庁赤レンガ庁舎の近くににあった富士フォトサロン（当時）で、礼文島在住の植物写真家杉田美野里さん（故人）、宮本誠一郎さんご夫妻の写真展を拝見し、礼文や利尻のこと、島に咲く花のことをいろいろ教えていただき歓談しました。それから10余年を経て大学に奉職後、学生を連れて島を再訪した際、杉田さんが高山植物を詳しく解説してくださいました。さらに、礼文町ホームページでは、小野徹町長（当時）が「花小部屋」というコーナーで、礼文島の花を連日紹介され、学生と島を旅した際には大変お世話になりました。

最北の離島「礼文と利尻」に、うま味の聖地巡礼と稀少な花々の鑑賞で心洗われる旅に出てみませんか！



礼文島の固有種 「レブンアツモリソウ」
（写真提供：礼文町 小野徹氏）



礼文香深 海鮮処かふか 「うに丼」



京都東山 料亭菊乃井本店
昼懷石 「八寸」



京都東山 無碍山房
時雨弁当 「先付け」



京都伏見 料亭 魚三樓
「煮物椀」



京都祇園 いづろ「鯖姿寿司」
（写真提供：京都祇園 いづろ）



京都南禅寺
総本家ゆどうふ奥丹「湯豆腐」



京都西木屋町 村上重本店
京都三大漬物 「千枚漬」

リニューアル赤れんが庁舎は何を物語るか?その2



杉浦 正人 (すぎうら まさと)

札幌建築鑑賞会 代表

1959年、愛知県生まれ。1982年、北海道大学教育学部卒業(社会教育・生涯学習論)。1991年、「わが街の文化遺産の再発見」をテーマとして学ぶ市民グループ・札幌建築鑑賞会を発足させ、代表を務める。「大人の遠足」「古き建物を描く会」などの行事を続けてきた。2023年から北海道新聞別刷「さっぽろ10区」に「札幌建物探訪」を連載。2024年、『さっぽろ探見 ちょっとディープなまち歩き』を刊行(北海道新聞社)。

前回に続いて

北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)が昨年7月にリニューアルオープンしました。赤れんが庁舎の価値を二つに分けて鑑みることとし、今回は「建物そのものの価値」を振り返りました。今回は「建物が周辺にもたらした価値」について述べます。

先に結論的なことを申し上げると、赤れんが庁舎の周辺は、庁舎との関わり合いで歴史を経ながら価値を重層的に高めてきました。以下、価値を物語るできごとを年代順に掲げ^{*1}、それぞれの位置を右の地図に示します。

- ① 明治期 敷地の空間構成
- ② 大正期 北3条通の整備
- ③ 昭和期 周辺の建物によるリスペクト
- ④ 平成期 北3条広場と再開発

赤れんが庁舎は北海道の心臓部であり、札幌の街は庁舎を中心として発展してきました。庁舎の存在によって、その周辺の環境や景観が豊かに形成されてきたともいえます。時系列にしたがって眺めていきましょう。



赤れんが庁舎の周辺(元図:札幌市地図情報サービス)

赤れんが庁舎が周辺にもたらした価値

(1) 明治期 敷地の空間構成

赤れんが庁舎は近世城下町における“お城”に匹敵します。城下町を前身とする都市では近代以降も城郭がランドマークとなり、都市の風格を印象づけてきました。庁舎の敷地は城郭の役割を果たしてきたかのようです^{*2}。

^{*1} 日本の近現代は必ずしも和暦の区切りで歴史的に区分できるものではないが、周辺のできごとを取り上げたところ、たまたま四つの和暦のそれぞれに属した。

^{*2} 前身の開拓使も含め、北海道庁が歴史的に果たしてきた役割に照らすと、封建社会の城郭へのなぞらえはあながち飛躍してもないと考える。果たした役割は肯定的意義だけでは語れないが、紙幅の都合で深入りは避ける。

敷地には北海道の現庁舎や道議会議事堂も含まれますが、面積は約58,000㎡に及び、札幌の中心部における格子状（基盤目状）の街区の四つ分を占めています。

注目すべきは敷地の広さのみならず、赤れんが庁舎が格子状街区の街路の交点に位置づけられたことです。四方の通りのアイストップに位置して、視覚的な効果を高めています。札幌の中心部では抜きでた立地といえます。

さらなる特徴としては、空地や緑地が大きな割合を占めていることです（下図参照）。敷地は開拓使札幌本庁舎の時代から縮小しながらも受け継がれ、赤れんが庁舎の建築に伴って池も掘られました。庁舎をお城の天守に見立てるならば、前庭の池はさながら内堀です。

この池は防火用に設けられたといわれますが、ジャポニズムの影響を受けた西洋画の庭園をも彷彿させます。周囲は明治時代の育樹の面影をとどめ、風致上の効果ももたらしてきました。



赤れんが庁舎と前庭の配置図
出典：道庁赤れんが庁舎前庭「木育」樹木マップ
（北海道のオープンデータから一部を利用）

(2) 大正期 北3条通の整備

赤れんが庁舎の東正面から東へ伸びる通りは、イチヨウの並木によってヴィスタ（見通し線）が形成されています。(1)で述べた視覚的な効果をさらに高めたものです。このイチヨウは1925（大正14）年に植えられました。道内に現存する街路樹としては最古といわれます。その前年、通りはいわゆる「木塊」によって



植樹間もない頃の北3条通（札幌市公文書館所蔵）

舗装されました。木塊は道産のブナ材を15cm×9cm×8.5cmのブロックにして、防腐処理をしたものです。札幌における舗装道路の先駆けとされます。

ここで特筆したいのは、並木を植えて「歩車分離」を実現したこと。札幌における近代的な街路としても先駆けの一つとなったのではないのでしょうか^{*3}。歩道側はアスファルトで舗装されました。

イチヨウは東京で荒川の堤防用に育てられていたものが譲り受けられ、当時樹齢19年の32本が植えられました。百年を経てこの並木が成長して、庁舎の前庭に続いて緑のボリュームを増しています^{*4}。札幌の中心部を特徴づける格子状の街区は、ともすれば単調な景観になりがちです。並木道は、赤れんが庁舎の存在感を際立たせたのみならず、周辺の空間にも心地よさを加えました。

ところで、イチヨウ並木というと、東京で1923（大正12）年に植えられた明治神宮外苑が知られます。並木道の正面にランドマークとなる「聖徳記念絵画館」を立地させた構成は、近代的な都市計画の成果でした。北3条通のイチヨウ並木は神宮外苑をモデルとしたように思われます。折しも1923年、東京は大震災に見舞われ、復興のためさらに都市計画が進められました。火に強いとされるイチヨウが北3条通に採用されたことには、このような時代背景も窺えます。

*3 緑地帯による歩車分離の道路としては、北海道帝国大学構内における現在の北13条通が札幌における草創とみられる。1922（大正11）年頃、整備された。欧米の都市事情に精通した教授陣の知見が反映されたものであろう。北大の並木もイチヨウだが、当初はカエデやサクラだったらしい。

*4 現在のイチヨウの数は29本だが、当初からの現存は27本とみられる。

(3) 昭和期 周辺の建物によるリスペクト

赤れんが庁舎の敷地の北側に隣接して「日本生命北門館ビル」という12階建てのビルが建っています。1982（昭和57）年の建築で、併設の公開空地は1983（昭和58）年、第1回札幌市都市景観賞を受賞しました。受賞理由を以下、引用します（原文ママ）。

1.本市初の個人施行の再開発事業により、植樹、ベンチ、照明灯、屋外小ギャラリー等を取り入れた、やすらぎのある公開空地と歩行者空間を創出している。

2.建物の外壁を旧道庁庁舎の屋根の色に合せたり、ポケットパークから道庁庭園をながめた視覚的広がり等、周辺の景観上の配慮がなされた公開空地となっている。

札幌の中心部にあって、動線や視線を意識しつつ、ゆとりのある空間が民間の土地に設けられました。これもまた赤れんが庁舎のたまものといえましょう。この公開空地は、建築基準法に基づく総合設計制度^{*5}を適用した札幌における先駆けと聞きます。

ビルそのものも、庁舎へのリスペクトを伝えていきます。タイル貼りの外壁を庁舎の屋根^{*6}の色に合わせたというのは、言われてみて初めて気づきました。煉瓦の色ではなく屋根の色に合わせたのは慧眼^{けいがん}です。それでいて、タイルはフランス積み^{*7}で貼られています。赤れんが庁舎の煉瓦の積み方と同じで、隠し味を効かせたような心憎い演出です。



日本生命北門館ビル（左方）と公開空地

^{*5} 一定の公開空地を設けることを条件に建築物の容積率等を緩和する（高層化を可能とする）仕組み。建築物が密集する都市の中心部において公共的な空間の確保、促進をねらいとする。

^{*6} 赤れんが庁舎の屋根は宮城県産の雄勝石^{おがついし}を用いた天然スレートである。1968（昭和43）年の復原改修に当たってもこの石材を再び用いた。

(4) 平成期 北3条広場と再開発

2014（平成26）年、(2)で述べた北3条通が道路から広場になりました。歴史的な木塊舗装を保全した上で、煉瓦を敷き詰めています。イチヨウの植樹^{ます}も植生に配慮して改善されました。デザインや素材には赤れんが庁舎へのオマージュが見て取れます。供給された煉瓦は江別・野幌産で、赤れんが庁舎の色合いに合わせて特注したそうです^{*8}。

車両交通が除かれ、人が自由に歩けるようになり、催し物の空間としても再生しました。大正期の近代的な街路の先駆けが1世紀近くを経て、再び時代を先駆ける空間となったのです。

北3条広場は、隣接する民間企業の再開発事業による「公共貢献」によって実現しました。新たに建てられた「札幌三井JPビルディング」との複合的な事業です。このビルも建物を全体としてセットバック（壁面後退）させ（低層階はさらに後退させ）、カフェテラスを設けるなどして、ゆとりやにぎわいの空間を創っています。

歴史を思い起こすと、北3条広場は先駆けというよりは市民自治復権への第一歩というべきかもしれません。ヨーロッパ中世の自治都市では広場に役場や教会が面し、その広場が街の中心に位置して自治の舞台となったからです。



北3条広場と札幌三井JPビルディング（奥）
商業施設「赤れんがテラス」

^{*7} 煉瓦の長辺と短辺を同じ段で交互に並べる積み方。段ごとに長辺のみ、短辺のみで積む「イギリス積み」に比べると手間がかかるが見栄えは美しいとされる。

^{*8} 笠康三郎氏のご教示による。煉瓦は米澤煉瓦株式会社（江別市）の製造で、同社は1968（昭和43）年の赤れんが庁舎の復原改修でも製品を供給した。

ちょっと寄り道 煉瓦は巡る糸車？

前回お伝えしたとおり、赤れんが庁舎の煉瓦は札幌近郊で焼かれました。白石村（現在の札幌市白石区）の「鈴木煉瓦製造場」などです。その煉瓦は、現在の豊平区西岡で昭和戦後期に建てられたリング倉庫にも使われていました。

鈴木煉瓦は昭和戦前期には操業を終えています、戦後建築の倉庫で見られたのはわけがあります。煉瓦はもともと、月寒（札幌市豊平区）にあった陸軍の施設に用いられたものでした。戦後解体されたときにリング倉庫で再利用されたのです。

その倉庫も2014（平成26）年、解体されました。解体時、その煉瓦が再び（三たび）別のところで使われたと耳にしました。持ち主だった方に伺うと、赤れんがテラス（札幌三井JPビル）のあたりに運ばれたとのこと。探したところ、2階の飲食店（カフェ）の外装に煉瓦が貼られているのを見つけました。古そうな煉瓦です。

断定はできませんが、もし赤れんがテラスで使われているとしたら、ここしかないと推理しました。これが鈴木煉瓦産だとすると、赤れんが庁舎の煉瓦と同じ出自です。1世紀余りの歳月を経て、糸車のように巡り巡って、最（再）接近したことになります。



赤れんがテラスの2階カフェ外装の古そうな煉瓦

おわりに

2回にわたり、赤れんが庁舎とその周辺を探訪してきました。庁舎のリニューアルでは、館内の展示も大幅に一新されました。展示自体も興味深いのですが、小稿ではその内容に触れることはできませんでした。展示を建物や周辺と関連づけることで、新たな気づきがあるかもしれません。

庁舎ではさまざまな催しも繰り広げられるようになり、ガイドツアー（有料）も実施されています。催しやガイドさんとの交流もまた、建物と相まって魅力を^{いやま}増してくるでしょう。願わくは、“年間入場券”のような仕組みができて、繰り返し訪れる人が増えることです。

赤れんが庁舎とその周辺は、相互に関わり合って価値を高め合ってきました。小稿をきっかけとして、赤れんが庁舎を観覧して周辺にも足を延ばし、周辺を歩きながら庁舎に足を向けていただけたら嬉しく存じます。

主な参考文献

- ・越野武『札幌クラシック建築追想』2024年
- ・公益社団法人土木学会北海道支部ウェブサイト
<https://www.jsce.or.jp/branch/hokkaido/jsce-hc.html>「選奨土木遺産」道庁正門前木塊舗装・銀杏並木
- ・札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫38 札幌の樹々』1986年
- ・公益社団法人日本造園学会北海道支部ウェブサイト
<https://www.hokkaido.jila-zouen.org>「北の造園遺産」第6号「道庁前イチョウ並木」、第40号「道庁赤れんが庁舎前庭」
- ・岩沢健蔵『北大歴史散歩』1986年
- ・越澤明『東京都市計画物語』初出1991年
- ・札幌市「第1回札幌市都市景観賞」パンフレット1983年
- ・札幌市北3条広場「アカプラ」ウェブサイト
<https://www.kita3jo-plaza.jp/index.asp>

瀋陽で過ごした三年間



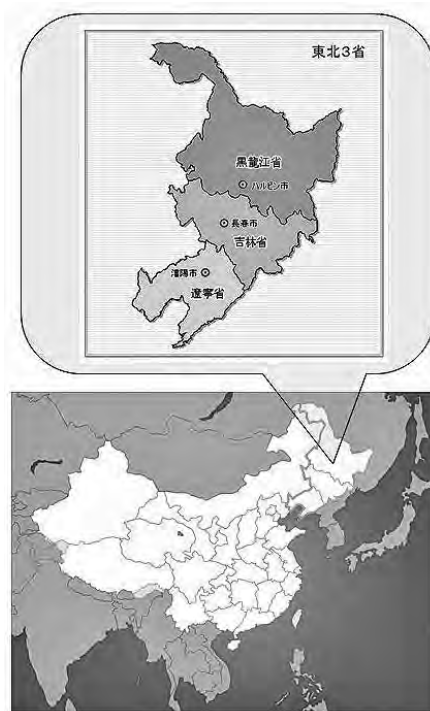
岩本 卓也 (いわもと たくや)

前・瀋陽日本国総領事館 領事
国土交通省北海道開発局小樽開発建設部工務課課長補佐

1999年北海道開発局入局、主に河川部門で勤務。2022年2月から2025年3月まで在瀋陽日本国総領事館に勤務し、広報・文化等を担当。2025年4月より現職。

はじめに

中国・東北地方の中心都市、瀋陽^{しんやう}。遼寧省^{りょうねいしょう}の省都としての活気がありながら、どこか懐かしい雰囲気も漂う街です。私は2022年2月から2025年3月末までの約3年間、瀋陽日本国総領事館で広報文化担当領事として勤務しました。振り返れば、この3年間は新型コロナウイルスの世界的流行から始まり、人と人とのつながりの大切さを改めて実感する時間でした。



在瀋陽日本国総領事館が位置する瀋陽市と中国東北3省の位置図
(一部、在瀋陽日本国総領事館HPより抜粋)

コロナ禍の渡航と隔離生活

瀋陽に赴任したのは、中国国内で、まさにゼロ・コロナ政策が厳しく実施されていた時期であり、特に遼寧省は他の地域と比較しても、入国者を厳しく管理していました。瀋陽到着後は28日間のホテル隔離、さらに28日間は滞在先での自宅隔離。成田空港を飛び立ってからというもの、ホテル隔離中は、防護服を着た人々以外とはほとんど接することがなく、空港の到着口、ホテルのロビーなども防護服を着た人間しかおらず、とても高い緊張感があふれており、まるで映画の中の

世界に來たような感覚でした。毎朝、防護服姿の担当者が部屋を訪れ、PCR検査や採血を行う日々。三食の食事は提供されましたが、緊張感も相まって口に合わず、領事館の方が差し入れてくださった食品や外売（ワイマイ）と呼ばれるフードデリバリー（マクドナルド、ケンタッキーフライドチキンなど、世界的なチェーン店は人気が高く瀋陽の街のいたるところにある）に助けられました。

ゼロ・コロナ政策の終わり

隔離終了後も約1年間、ほぼ毎日PCR検査を受ける緊張感のある生活が続きました。建物に入る際、公共の交通機関に乗る際や車で都市間を移動するのにもPCR検査結果が陰性であることを示す電子証明が必要な生活でしたが、終わりは突然やってきました。昨日まで当たり前のように続いていた検査が、ある日「明日からなくなる」と告げられ、翌日には本当に検査場に誰もいなくなっていました。詳細がわからないまま、仮設の検査場が撤去され、街に少しずつ活気が戻っていくのを感じました。コロナ禍に渡航したため、それ以前の東北地方がどのような状況だったのかわかりませんが、私が瀋陽に滞在した期間の終盤には、国内観光も盛況で、瀋陽の故宮や黒竜江省のハルビンの中街といった観光地には観光客があふれており、元の状況に戻っていたのではないかと思います。



2022年6月の世界遺産「瀋陽故宮」の様子。この頃は人もまばらだが2024年には520万人を超える観光客が訪れたという



2025年1月のハルビンの観光地である中街の様子。ロシア風の建物が建ち並び、多くの観光客がイルミネーションやショッピングを楽しんでいる

日本文化を伝えるという仕事

領事館での私の職務は、日本文化を現地に紹介し交流を深めることなどでした。空手、剣道、華道、和食、和菓子などの実演やワークショップなどを開催しました。

コロナ禍などで多くのイベントが思うように進められない状況の中でも、現地の講師や関係者の皆さんが熱意をもって支えてくださいました。瀋陽で剣道を学ぶ姿を見たいと思い、中国人だけで運営されている剣道場の稽古を見学させていただいたことがありましたが、その真摯な稽古姿には胸を打たれました。空手、華道などの講師の方々も、技術だけでなく、文化的背景についても丁寧に学んでおられ、武道家、芸術家としての高い意識を感じることができました。

日中友好50周年記念イベント

実施した文化イベントの中でも、特に印象に残っているのは、日中国交正常化50周年記念の一環として開催した和食・日本酒のペアリングイベントです。イベントは、瀋陽市内の日本食レストラン関係者やホテル、小売店の方々などを招き、日本各地の郷土料理と日本酒の組み合わせを体験していただきました。料理は、北海道や青森、山形、新潟、富山、鳥取、島根、愛媛など、東北三省と友好関係にある自治体の郷土料理を、

農林水産省のHPで公表されている郷土料理のレシピを参考に、日本の食材を使えないことから、現地の食材を使って再現することにしました。ホタルイカを使う予定だった富山県の料理は、コロナ禍で食材の輸送が止まってしまい、急遽別の料理に変更せざるを得ませんでした。地元の日本食店の方々の協力で、ほとんどの食材を揃えることができました。現地の公邸料理人が腕を振るい、現地で日本酒の輸入に携わっている日本酒の専門家による講演も行い、盛況でした。



日本酒と日本料理のペアリングイベントで提供した郷土料理

北海道のイメージ

私が中国で様々なイベントに参加し、様々な人々にあって感じたのは、北海道のイメージがとても良いことでした。日本に興味を持っている方や日本語を学ぶ学生との交流の場などで、多くの方が北海道に興味や好意を抱いているという話をされることが多く、私が北海道から来ていることを伝えたと話がスムーズに進む場面も多くありましたし、実際に札幌に留学していた方も多く、札幌のローカルな話題で話が弾むこともありました。ハルビンのデパートで北海道フェアが開催された際には、売り場を見学しデパートの方の話も伺いましたが、市民からの評判も大変良いとのことでした。またイベントでも北海道や札幌の観光パンフレットを並べると比較的早くなくなりました。日本を離れ中国に駐在して、改めて北海道の可能性の大きさを感ずることができたのは大きな収穫だと思っています。

瀋陽における日本の味

瀋陽には、日本の外食チェーンも数多く進出しています。牛角、吉野家、すき家、そしてローソン。日本と同じ味のメニューに中国独自メニューを加えた店もあれば、中には日本と全く異なるメニュー・味を提供している店舗もあります。ローソンは遼寧省内だけで700店舗以上を展開し、日本とは商品が異なりますが、日本と同様にホットスナックやスイーツの種類が豊富です。また、市内には日本式のラーメンに惚れ込んだ勉強熱心な中国人店主が経営するラーメン店もあり、麺も自家製。中国では、日本風のラーメンのことを日本式ラーメンといい、瀋陽では日本式ラーメンとうたっている店も、全く日本の味とは異なっていることも珍しくないのですが、その店では、味噌、塩、醤油、ほか日本の流行を取り入れた様々なタイプのラーメンを麺の種類も使い分けながら提供し味はどれも満足できるものでした。また領事館周辺には日本料理店も数軒あり、味も美味しく、日本の味に困ることは、ほとんどありませんでした。また隔離ホテルではあれほど口に合わなかった中国料理も、いろいろな場で食べると、中には辛すぎて口に合わないものもありますが、とても美味しい料理もたくさんあることを知ることができました。中国料理といっても様々な料理があり、東北地方には東北料理があります。東北地方では、代



チャーシューも部位を使い分けるなどこだわりを感じる中国人店主が作る日本式ラーメン

表料理である水餃子も美味しいのですが、日本ではあまり馴染みのない料理にも美味しいものが多く、衣をつけ揚げた豚肉に甘酢で味付けした鍋包肉（グオバオロー）は、サクサクとした食感と甘酢の味がとても美味しく好物になりました。



鍋包肉（グオバオロー）

白酒の乾杯と人のぬくもり

私はあまりお酒が強くなく、ビールでもせいぜい一杯程度が限界なのですが、中国では宴席で「白酒（バイジュウ）」という蒸留酒を一気に飲むのが習わしです。「無理しないで日本式でいいですよ」と優しく言うくださる方がほとんどですが、時にはまれに「ここは中国式で」と勧められることもありました。度数50度を超える白酒を小さなグラスで一気に飲むと、飲んだ瞬間には胸が熱くなるのですが、不思議と酔いが醒めるのがビールなどと比較してもとても早く、自分でも思っていたよりは飲めることに気づきました。中国では乾杯は宴の最初だけでなく、途中でも随時発生します。円卓で一人一人が所感などを述べながら乾杯がまわることや、いきなり誰かが乾杯することもあります。円卓で何度か乾杯を重ねるうちに、次第にそれが交流のリズムや宴の調和を図っているように感じられるようになりました。初めてお会いする方々とでも、言葉や文化の違いを超えて、穏やかに笑い合いながら

グラスを交わす時間は、お互いの違いを認めながら交流することの大切さや、また相手を大切にす一期一会の精神を感じることができ、同じ文化圏であることを強く感じました。

三年間を振り返って

瀋陽での三年間は、困難と制約の中にも、人と文化のつながりを実感した時間でした。中国と日本は同じ漢字文化圏ではありますが、違いはあります。似ているが故に様々な誤解や認識の差も生じますが、だからこそ、互いの地域や文化の違いを理解することが重要であり、違いを認め互いを尊重し、笑顔を交わすことで築かれる信頼こそが、本当の絆なのだということを瀋陽での生活を通じ学びました。この経験を通して得た学びを胸に、これからも人と人をつなぐ架け橋でありたいと思います。



日本最北端の稚内ブランド『稚内牛乳』

佐々木 陽一 さん (ささき よういち)

北宗谷農業協同組合 稚内支所 経済課(稚内牛乳) 係長兼店長

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

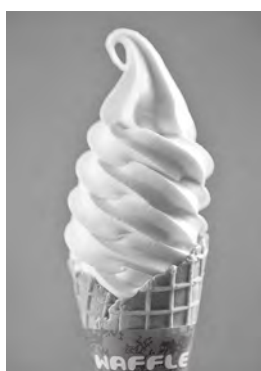
今回は「わが村は美しくー北海道」運動第10回コンクールで優秀賞を受賞した「北宗谷農業協同組合稚内支所稚内牛乳」の佐々木さんにお話を伺いました。

《稚内は日本でも数少ない放牧型酪農の適地》

稚内市は、北海道の最北に位置し、宗谷海峡を挟んで東はオホーツク海、西は日本海に面し、漁獲量日本一のホッケやミズダコをはじめ、カニやホタテ、ウニなどの海産物が有名です。また、広大な土地と冷涼な気候から牧場が数多く点在する酪農地帯でもあり、日本でも数少ない放牧型酪農の適地で、生乳の生産も盛んな地域です。しかし、大消費地から遠いため生産された牛乳はすべて加工品として使用されていました。そこで前身の稚内農業協同組合沼川農業協同組合は地元の人たちに「稚内のおいしい牛乳を知ってもらい、飲んでもらいたい」と2007年4月から『稚内牛乳』の生産・販売を開始しました。



JA北宗谷
<https://ja-kitasouya.jp/milk>



『稚内牛乳自家製ソフトクリーム』
稚内産生乳をふんだんに使用し、水あめや練乳を加えないため、ボディが柔らかく溶けやすいソフトクリームですが、食べ終わった後ののどの渇きやイガイガ感のない、稚内牛乳直売店でしか食べられないソフトクリームです。



稚内市内のスーパー内にある稚内牛乳の直売店

《牛乳本来の味にこだわり続けて20年目へ》

通常市販されている牛乳の9割は、120℃以上で1～3秒間殺菌する超高温殺菌法です。稚内牛乳は、65℃で30分間保持するノンホモ低温殺菌法で製造されているのが特徴です。ノンホモ低温殺菌することで、生乳本来の風味が残り、クリーミーでまろやかなおいしさを味わうことができます。

当初は、稚内副港市場の店舗内で牛乳の生産・販売を行っていましたが、2017年に北宗谷農業協同組合稚内支所の建物を改装し事務所のバックヤードに専用の工場を併設し、本格的に生産・販売をスタートしました。商品も「のむヨーグルト」「アイスクリーム」などラインナップも増え、市が推奨する「稚内ブランド」の認定品やふるさと納税の返礼品にもなっていて、稚内以外にも広く認知されるようになりました。

牛乳は市内の学校給食で飲まれていたり、組合の青年部が中心となって小・中・高校でバター作りの体験学習を実施するなど、稚内牛乳の普及活動や食育にも貢献しています。また市内のイベントや催事にも積極的に出店し稚内牛乳をPRしています。

「以前、あるイベントに出店した際に、親御さんと来たお子さんが稚内牛乳を購入してくれたのです。他のお店にはジュースもあるのにビックリしましたが、うれしかった出来事としてすごく印象に残っています」と佐々木さんは笑顔で話してくれました。

2007年からスタートした活動も2026年度には20年目に入り節目の年を迎えます。これからも稚内牛乳は皆さんに喜んでいただける商品を一生懸命作り続けていきます。稚内を訪れた際には、ぜひ飲んでみてはいかがでしょうか。

当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子「生産空間の活性化に資する地域事例集」をご覧ください。



盤渓地区に人の手が入らない山を残そうとしている団体がある。もともとの山の所有者だった横山誠さんよこやままことが近年立ち上げた一般社団法人にむの森だ。人が踏み込まない、手付かずの山を後世に残したいと、横山さんが考え始め、その考えを知ってもらうためのツリーハウスを建てたのは、かれこれ12年前のこと。森と人の間をつなぐ場として、森の生態系の中に人が入れる場としてツリーハウスを作ったそうだ。

一度人の手が入った森は自然の生態系に戻るまでいったい何年かかるのだろうか？横山さんは「この森は100年近く人の手が入ってない。それでも二次原生林に戻るまでは500年かかると思っている。」と話す。気の遠くなる話だが、自然との営みは人間の時間感覚とは違う速度で生きているのだということを痛感する。

横山さんは先代から引き継いだ会社が森林伐採をする林業であった。途中でその仕事が嫌になり、仕事を変えた経歴がある。その罪滅ぼしで始めたようなものと「人工林の木々は争っているが、自然林の木々は助け合っているということがわかってきた」という。

本来、人も自然の一部。だから自然林に手出しせず、この環境を維持するために尊重し助け合わなければ、どこかで綻びが起きる。山は山に生きるものの「もの」なのではと思う。それは昨今の熊の出没しかり、海水温が上昇し、雨の降り方、風の吹き方も変わり、四季が失われ二季となってきたことと結びついているのではと思わずにはいられない。「森から学ぼう」と呼びかけるにむの森の活動がこれからも広く周知され、二次原生林となる500年を目指し、次世代につながっていくことを祈っている。



にむの森、ツリーハウス 2 号棟

すずき もも

イラストレーター・絵本作家／元スローフードさっぽろ事務局長

東京生まれ、北海道夕張育ち。広告や雑誌、カレンダーなどのイラストを描くほか、イラストで綴る町案内の本や絵本などを執筆。ほか、「スローフードさっぽろ」を2016年に立ち上げ、食を中心に環境や暮らしの大事に取り組んでいる。著書に絵本「はるとなつ はたけのごちそうなーんだ？」（アリス館）「おいしい大地、北海道」（イースト・プレス）がある。近著に絵本「はたけのごちそうなーんだ？くだもの」（アリス館）がある。モットーは4つのS。「Simple, Slow, Small, Smile: ささやかに、ゆっくり、ほどほどに、にこにこ」。

思わぬ縁から趣味が仕事へ ～名寄で見つけた新たな挑戦～



阿部 真樹 (あべ まさき)

1994年11月3日生まれ、千葉県八千代市出身。大学卒業後、都内の私立中高一貫校で数学教員を務め、その後、生命保険の営業マンとして勤務。2024年5月から名寄市の地域おこし協力隊として着任。

【フライフィッシングガイドの修行】

コンサル会社に勤めている地元の友人の営業先が、名寄市にあるフライフィッシングのガイドとショップ(WILDLIFE FLY FISHING SHOP NAYORO)でした。その友人はオーナーの千葉貴彦氏から商談終わりに、「名寄は釣り人にとって日本一良い環境に恵まれているのに、ガイド不足という現状はもったいない。フライフィッシングガイドという仕事は後生に残しておくべき仕事だ。誰か釣りやアウトドアに興味がありそうな人はいないか」という問いかけがありました。その時に、友人が真っ先に私のことを思い浮かべてくれたおかげで千葉氏と私が知り合うことができました。概要は友人から聞いたものの詳しい話は直接聞いて欲しいとのことで、その友人も含め3人でオンラインで話す機会を作ってもらい、そこで名寄市のことやフライフィッシングのことなど今まで聞いたことのない話を聞きました。しかし私は海でのルアー釣りやエサ釣りの経験しかなく、フライフィッシングは未経験だったことも

あり、微妙な空気のままその場は終わってしまいました。私は数ヶ月たってもその話が心残りだったので、再度千葉氏に連絡を取り、実際に名寄市に伺い、直接話を聞く機会をいただきました。千葉氏からは改めてフライフィッシングの魅力やフィッシングガイドとは何かなどを聞きました。その時に地域おこし協力隊という制度のことも初めて知りました。そのような制度があることにも驚きましたが、釣りのガイドの仕事があり、それで生活している人がいることに対して、大きな関心を持ちました。もちろん釣りも好きですが、緑あふれる自然や美しい景色も好きですし、人と楽しい時間を共有することも好きな私にとっては、ガイドという仕事は天職だと感じました。名寄市の自然環境の豊かさ、フライフィッシングの魅力、そしてガイドとして地域に関われる機会があるという点に強く惹かれ、まずは3年間千葉氏の下で修行だと思い、名寄市の地域おこし協力隊に応募しました。

【奥深いフライフィッシング】

フライフィッシングは、道具を揃えて、いきなり現場に行ってもすぐには始められないことに衝撃を受けました。公園やショップの敷地でキャストイング*練習をして、ある程度うまくキャストイングができるようになってから、ようやく現場に行けるようになります。また、フライ(擬似餌)を自分で作ることも驚きました。今までは、釣具屋で売っているルアーをそのまま使っていましたが、鳥の羽や獣毛などを使って作る一種の芸術作品のようなフライが自分でもうまく作れるのか不安でした。今現在も絶賛奮闘中ですが、紛い物なりに時間をかけて一生懸命作ったフライを使って魚が釣れた時の喜びというものは、ほかでは味わえない感動や快感があり、これがフライフィッシングの魅力の一つなんだと日々実感しています。キャストイングに関しても、フライタイン



名寄市のPR動画の撮影中に釣れたニジマス。YouTubeで観られます

*キャストイング

フライを遠くまで運ぶための独特な技術・投げ方。

グ（フライを作ること）に関しても、奥が深くまだまだ学ぶことが多くあるので、地域おこし協力隊の期間中だけに限らず、任期終了後も新たな発見や学び、トライアンドエラーが続くことになりそうです。フライフィッシングの経験は、名寄市に来てから始めたので、まだお金をもらってのガイド業はしていませんが、東京から遊びに来る友人や名寄市在住の初心者などをガイドの練習だと仮定して連れて行く機会は増えていきました。協力隊3年目になる来年こそは、実際のお客様を相手にガイドすることが目標です。

【オフシーズン】

釣りのオフシーズンは、名寄市の「ピヤシリスキー場」の第2ゲレンデにある「ログパノラマ」という飲食店でお手伝いをしました。こ



「ログパノラマ」にてワカサギの天ぷらを販売

のオーナーである坂口智則氏は、夏期間は石狩市浜益で民宿を経営し、冬期間になるとログパノラマのほかにも名寄市内で民泊も経営されています。ガイド業とも相性の良い民泊経営のノウハウだけでなく、これまでの経験など、貴重な話をたくさんしてくださいました。教えてもらったことを参考に、私も名寄市で良い物件を見つけ、民泊経営もしたいと思っています。ログパノラマでのお手伝い中に困ったことといえば、外国人対応です。慣れない英語で対応するのは緊張してしまい、初めのうちはうまくコミュニケーションをとることができませんでした。坂口氏からもアドバイスをいただいたおかげで徐々に慣れていき、少しずつ話せるようになりました。英会話は釣りのガイドにも必要となるスキルなので、もっと話せるように日々勉強しています。ある日、坂口氏から何かお客様に喜んでもらえるようなメニューを考えて、実際に販売しても良いというチャンスをいただきました。飲食店でのアルバイトの経験はあったものの、メニューを考えて提供した経験はなかったのでとても悩みました。そんななか、

友人に誘われて隣町の幌加内町にある朱鞠内湖^{しゅうまりない}でのワカサギ釣りに行きました。よく目にする風景、氷に穴を空けて、そこから糸を垂らして釣るワカサギ釣りですが、釣れたワカサギを天ぷらにして食べた時のあまりの美味^{おい}しさに感動しました。これをヒントに、ログパノラマでもワカサギの天ぷらを出してみたらどうかと思い、シーズン途中から「ワカサギの天ぷら」を販売していました。意外にも好評で、小腹を満たすおやつやビールのおつまみとして買ってくれる方が多かったです。また外国のお客様にも召し上がってもらい「good!」と言われた時は、とても嬉^{うれ}しかったです。

初めて冬の北海道、しかも道北の名寄市で生活してみて、散々周りの人たちに注意喚起を受けながらも、水道凍結1回、雪道でのスリップ1回、スタック2回など、しっかり雪国の洗礼を浴びたことも振り返ると良い経験ができたと思います。2度目の名寄市の冬は、トラブルなく快適に暮らしてみたいです（笑）

【経験豊かなガイドを目指して】

まず第一優先は師匠である千葉氏のようなフライフィッシングガイドになることが目標です。しかし、現実的に地域おこし協力隊を卒業してすぐそのようになれないということが、これまでの経験で思い知らされました。フライフィッシングはそれだけ奥が深いということです。地域おこし協力隊の任期を終えても、焦らずに着々と釣りの技術の向上や経験を重ねて、少しずつ師匠に近づいていきたいです。その間フィッシングガイドだけでは、生計を立てられないと思うので、協力隊の期間中に取れる資格の取得や新たなチャレンジをしていき、任期終了後も名寄市で生活できるような準備を進めています。



名寄川でのフライキャストの様子

少しずつ、右肩あがりのえんべつに。 ヒトモノコトをつなぎなおして、しなやかに持続するまちへ

NPO法人 えんおこ

【NPO法人えんおことは】

北海道のひだりうえにある人口約2,300人の遠別町^{えんべつちよう}を拠点に活動するNPO法人えんおこ（以下、「えんおこ」）は、地域の“あたりまえ”を丁寧に見つめ直し、暮らし・産業・人・情報をつなぎなおすことで、“しなやかに持続するまち”を目指す特定非営利活動法人です。

過疎で変化が見ゆるやかでも、“ちいさな力でも変えることができる世界がある”という信念を礎に、都会では埋もれがちなスキルやアイデアを、町の“隙間”に活かすべく活動しています。



えんおこの活動指針

【主な活動内容】

(1) 移住・交流事業

遠別町における交流人口、関係人口、移住定住促進のため、体験型プログラムや移住支援を実施していま



大学生の受入と交流事業

す。具体的には、町の暮らしを知る「おためし暮らし生活体験」や移住相談、2泊3日～1週間程度の滞在体験や、写真・動画を使ったPR活動を通じて、「こんな暮らしもある」と興味を持ってもらう仕掛けをつくっています。

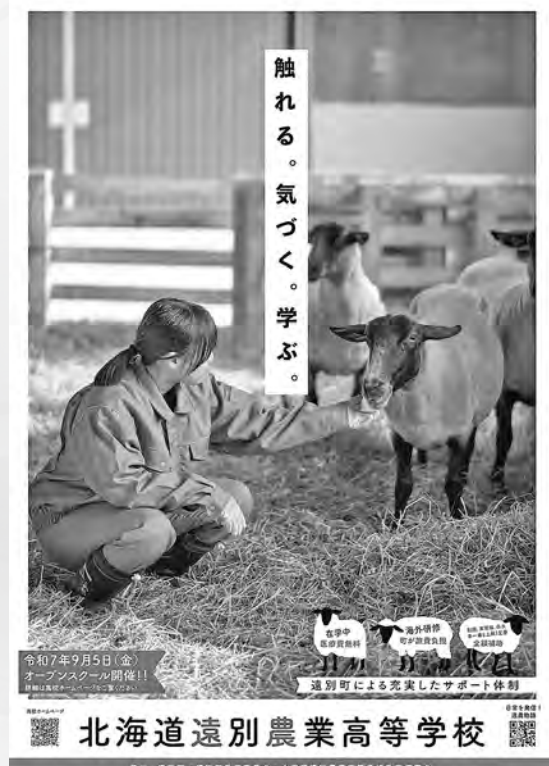
この事業により、町外の方が“遊びに来て、暮らしを考える”きっかけづくりとして機能しています。

(2) 学び・暮らし支援

町内小学5、6年生～中学1、2、3年生を対象とした公設民営塾「えんべつ学びの場」の運営支援を実施しています。これは地域の子どもの学びを支え、地域に根ざした教育環境をつくる取り組みです。

(3) 高校魅力化プロジェクト(遠別農業高等学校支援)

遠別町には農業高校があり、人口減少とともに生徒数の確保が課題となっていました。えんおこは、この高校の生徒募集支援として、パンフレット・ポスター・



最北の農業高校、遠農

Webサイト「遠農物語」の運営を行っています。

この取り組みでは、学校・行政・地域が協働し、役割分担を明確にした体制で実践されており、「高校＝町の発信拠点」という視点も伴っています。

(4) 地域産業・特産品づくり支援

町の特産品を活用した飲食店「つながりキッチン comedokoro (コメドコロ)」を運営し、地元産品を活かしたお弁当・オードブル販売、イベント出展を行っています。また、遠別町の特産品を活用して6次化を実施し、ふるさと納税の返礼品の製造を行っています。



遠農とのコラボ新商品「遠農切り餅」

(5) 地域おこし協力隊支援

遠別町で活動する地域おこし協力隊の募集から配属後の活動サポート、伴走支援を行っています。現在も募集中です。



遠別町地域おこし協力隊の募集について

(6) 地域情報の発信・クリエイティブ支援

ドローンやアクションカメラ・一眼レフによる撮影、映像編集、デザイン制作などを活用し、遠別町の風景・産業・暮らしを外部に発信しています。

具体例として、広報用パンフレットやポスターを制作したり、HP・SNSを通じて町全体の魅力を掘り下げて伝える活動を行っています。

[PR]

遠別町には、都会では見落とされがちな「隙間」と「ゆとり」があります――。

「大きな町では、ひとりが動いたところでなかなか見えづらい。でも、遠別町のような“ちいさなまち”では、ひとりの働きが町の暮らしを変えていく影響力を持つことができます。これは、えんおこが発信し続けてきたメッセージです。

私たちえんおこは、この町の「暮らし・産業・人・情報」のすべてに丁寧に向き合い、変化を楽しみながら、「北海道のひだりうえ」というロケーションを活かし、クリエイティブな手法と地域資源を掛け合わせています。

「何かやってみたい」「都会とは違う暮らしをしてみたい」「自分のスキルを地域に還元したい」――そんな思いをお持ちの方、まずは遠別町を訪れて、えんおこと一緒に“隙間”に挑戦してみませんか。2泊3日からの体験滞在もご用意しています。



NPO法人 えんおこ

<https://note.com/inakaworks/n/ndd78e2276608>

シンポジウム のご案内

テーマ

当協会では、今後の北海道における脱炭素社会に向けた普及・展開に寄与すべく、道内の再生可能エネルギーを活用した地域活性化に関わる取り組みなどをまとめた小論集『北海道における再エネ活用と持続可能な地域に向けた取り組み』を2026年2月に発行予定です。

これに合わせてシンポジウムを開催し、再生可能エネルギーの活用による効果や、地域経済、雇用、CO₂排出削減量への影響など、特に町の暮らしをどう改善し、未来のまちの活性化に繋げていくのか。各執筆者らによる報告と、“北海道らしい再エネ活用と地域活性化”についてディスカッションを予定しています。ぜひ、ご参加ください。

令和8年3月16日(月)
14:00～16:40(開場・受付13:30～)

かでる2・7 8階「820研修室」

札幌市中央区北2条西7丁目道民活動センター

定員 先着100名(参加無料)

申し込み 下記のURLまたは、二次元コードからお申し込みください。「FAX」でも参加申込可。
<https://questant.jp/q/WZ77TDUF>

申込期限 2026年3月11日(水)まで

《プログラム》

※参加者には、各報告をまとめた小論集を
進呈いたします。

第1部 各報告

- 地域社会の発展と再生可能エネルギー事業の成立要件
上園 昌武／北海学園大学 経済学部 教授
- 再生可能エネルギーの活用と道内産業の成長及び経済活性化予測
小原 伸哉／北見工業大学 工学部 教授
- 再生可能エネルギーと地域の利益—地域課題をプラスの価値に変える
寺林 暁良／北星学園大学 文学部 准教授
- 持続可能な農村づくり—余市エコビレッジのエネルギー自給の取り組み—
山形 定／北海道大学大学院工学研究院 特任助教
- バイオガスプラントと循環のまちづくり
酒井 恭輔／フロー株式会社 専務取締役

第2部 パネルディスカッション

「北海道らしい再エネ活用と地域活性化」

- ◇コーディネーター 上園昌武氏
- ◇パネリスト 各報告者

参加申請書(FAX用) FAX: 011-709-5225

所 属	
氏 名	
連 絡 先	TEL : E-mail :

問い合わせ先

(一財) 北海道開発協会 開発調査総合研究所

Tel : 011-709-5213 / E-mail : kenkyujo@hkk.or.jp / URL : <https://www.hkk.or.jp/>

北海道らしい
地域活性化と
再エネ活用を
目指して

お知らせ②

(一財)北海道開発協会 シンポジウムのご案内

全国に先駆けて人口減少が続いている北海道では、過疎化や家族形態の多様化などを背景に、地域における人と人とのつながりの希薄化やコミュニティの弱体化が懸念されています。こうした状況を踏まえ、当協会では、2023年度から有識者による研究会を立ち上げ、「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」に着手しました。本研究会では、地域コミュニティにおいて重要な役割を果たす町内会の現状や今後の方向性を検討する等、これからの時代に求められる地域コミュニティのあり方について調査研究を進めてきました。

このたび、3年間の調査結果を報告書にまとめ2026年2月下旬に発行（予定）します。これに合わせて、研究会メンバーによるシンポジウムを開催し、地域コミュニティにおける町内会活性化の方法論等について議論いたします。ふるってご参加くださいますようご案内申し上げます。

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所
所 長 目 黒 聖 直

テーマ

『持続可能な地域コミュニティに向けて』

ー 町内会活性化のヒントを探る ー

■第一部

- (1) 事例報告「将来を見据えた町内会づくり」
報告者 西山 哲志氏 新琴似三番中央第二町内会長
- (2) 研究成果報告「持続可能な町内会のあり方について」
武岡 明子氏 札幌大学地域共創学群教授

■第二部

- (1) パネルディスカッション テーマ「これからの地域コミュニティのあり方について」
〔北海道における地域コミュニティ研究会メンバー〕
・コーディネーター 武岡 明子氏
・パネリスト 林 琢也氏 北海道大学大学院文学研究院准教授
小内 純子氏 札幌学院大学名誉教授
片山めぐみ氏 札幌市立大学デザイン学部准教授
- (2) 研究会メンバーによる質疑応答

開催日 2026年3月17日（火）14：00～17：00（開場・受付13：30～）
場所 かでる2・7 8階『820研修室』（札幌市中央区北2条西7丁目）
定員 先着100名（参加無料）
申込方法 下記のURLまたは、二次元コードからお申し込みください。（FAXでも申込可）
<https://questant.jp/q/IIBAH9OH>
申込期限 2026年3月11日（水）まで
主催 (一財)北海道開発協会



【シンポジウム 参加申込フォーム（FAX用）】

E-mail : kenkyujo@hkk.or.jp FAX 011-709-5225

所 属 機 関		
氏 名		
連 絡 先	E-mail :	TEL :

《問い合わせ先》

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所 担当:曾田、中川 TEL 011-709-5213

(一財)北海道開発協会

令和8年度 地域活性化活動助成募集のご案内

(一財)北海道開発協会では、このたび令和8年度の地域活性化活動助成にかかる活動を募集しています。助成の概要は下記のとおりです。

記

●対象とする活動

非営利の市民団体が道内で実施する地域づくりの企画、推進または実施の活動で、以下の項目全てに合致しているもの。

- *地域の発展に貢献するもの
- *地域の特性を生かすもの
- *他の地域、民間活動のモデルとなるもの
- *活動の継続性が見込まれるもの

●申請の方法

地域活性化活動助成募集要領に基づき、所定の申請書に必要事項を記入の上、添付書類をあわせて下記の期限までに提出ください。

なお、地域活性化活動助成募集要領および申請様式は、下記の宛先までご請求いただくか、(一財)北海道開発協会のホームページからダウンロードしてください。

●申請受付の期限

令和8年4月20日(月)(当日消印まで有効)

●助成額

1団体当たり1件、70万円を限度として選考により助成を行います。

申請書の提出とお問い合わせ先

住 所	〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌北ビル
宛 先	一般財団法人北海道開発協会 開発調査総合研究所 研究助成担当
お問い合わせ	電話 011-709-5213 FAX 011-709-5225 担当：中川、曾田 E-mail : kenkyujo@hkk.or.jp
当協会のURL	https://www.hkk.or.jp

一般財団法人北海道開発協会 開発調査総合研究所

第39回



▶ Web配信(収録版)

寒地土木研究所講演会

～土木が創る魅力ある地域、心豊かな暮らしへ～

Web配信期間

2026年2月16日(月)9時～25日(水)17時

申込期間 2026年2月5日(木)9時～19日(木)17時

視聴無料

申し込みは
こちら

寒地土木研究所 HP から事前申込をしてください。
<https://chouseikan.ceri.go.jp/web/event/>



令和7年11月6日(木)札幌市「かでる 2・7」で開催の第39回寒地土木研究所講演会で
集録したものを Web 配信します。



JSCE25
-1405
3.2単位

本講演は、公益社団法人土木学会継続教育(CPD)プログラムとして認定されています。
令和7年11月6日(木)現地開催の第39回寒地土木研究所講演会にご参加いただき CPD 単位を取得された方
は、同一の認定団体へ本 Web 配信と重複して CPD 受講証書を申請することはできません。

【特別講演】

「土木 × 教育で創る北海道の未来」
～北海道開拓の初めに
学校があった～

約60分

一般社団法人北海道開発技術センター地域政策研究所参事
認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長

新保元康氏

【一般講演】

「社会構造の変化に対応した資源・資材活
用・環境負荷低減技術の開発」

約25分

土木研究所 先端材料資源研究センター (iMaRRC)

材料資源研究グループ長

新田弘之

【一般講演】

「積雪寒冷地の橋梁床版、道路舗装の効
率的な維持管理技術について」

約25分

寒地保全技術研究グループ長

島多昭典

「地域社会を支える冬期道路交通サービ
スの提供に関する研究開発」

約25分

寒地道路研究グループ長

松澤勝

「気候変動下における水資源・水環境の変
化予測技術の開発」

約25分

水環境保全チー 上席研究員

横山洋

「水産王国・北海道の未来を担う漁場生産
力の強化」

約25分

水産土木チーム 上席研究員

西崎孝之

お問い合わせ

国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地技術推進室

TEL : 011-590-4046 平日/9:00～16:00 E-mail: lecture2025@ceri.go.jp

お知らせ

✎ 研究所だより ✎

世界には、ローマ、イスタンブール（コンスタンティノープル）や西安（長安）といった長い歴史を有する都市があります。もっと古い街、例えば、規模は違いますが、サマルカンドなどもあります。一方で、バビロン、カルタゴ、ペルセポリスなどの古代都市は、今日では廃墟（きょ）となっています。それでも観光客が訪れており、それは、一時は大変な栄華を誇ったその場所にロマンを掻き立てられるからだと思いますが、やはり「昔の光 今いずこ」的な寂しさは残りましょう。

北海道の街は、一部を除けば二百年ほどの歴史しか持ちませんが、それだけにご先祖様の開拓に傾けた情熱は、身近なものに感じることもできます。それなのに、多くの街が人口減少に見舞われて、将来も存続していけるのかと危惧される今日この頃です。

人口や高齢化の将来推計が示され、確かに危機感はある程度共有されています。けれど、推計が語る未来を憂慮しても仕方ありません。問題は、今なにができるか、です。当研究所の調査研究も、そのためのヒントを掴（つか）めないかという思いで進めています。

故郷の街がなくなる悲しみを生むことは避けたいと感じます。更地となったのちにダム湖の底に沈んでしまった集落に生まれた筆者には、とりわけその思いは強いのです。（目黒）

2月16日（月）～2月25日（水）

第39回寒地土木研究所講演会Web配信（収録版）

※詳細は47ページをご覧ください。

2月17日（火）～2月19日（木）

第69回（令和7年度）北海道開発技術研究発表会

2月17日（火）基調講演

11:00～12:00 北海道開発局研修センター

北海道の新しい価値を生み出す地域連携教育による「共創」の推進

新保 元康 氏（特定非営利活動法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長）

問い合わせ

／北海道開発局事業振興部技術管理課

技術開発スタッフ TEL 011-709-2311

／寒地土木研究所寒地技術推進室 TEL 011-590-4048

国営滝野すずらん丘陵公園

2月15日（日）

冒険あそび場きのたんの森

滝野の森のプレーパーク。ボランティアさんの見守りのなかで、冬の森あそびを楽しめるあそび場です。尻すべりや、雪だるまづくりなど…自分であそびを見つけて自由に過ごしましょう。

●参加費 無料（駐車料金は別途）

●場 所 滝野の森ゾーン・東エリア内

●定 員 なし（当日現地受付）

●時 間 12:00～14:00（時間内出入り自由）

※会場は積雪状況で決定。当日「森の交流館」でご確認ください。

2月22日（日）

たきの森フェス～2026Winter～

第27回目の開催となる今回のタイトルは「たいけん！ノモリ調査団7」に決定！滝野の森に住む謎のいきもの「ノモリ」を調査する“ノモリ調査団”になって冬の森を探検しよう！一日中お外であそんでもへっちゃらな服装でお越しください！

●参加費 無料（駐車料金は別途）

●場 所 滝野の森ゾーン東エリア 森の交流館

●定 員 なし（当日現地受付）

●時 間 10:00～15:00（14:00受付終了）

※詳細は当公園ホームページ（URL：<http://www.takinopark.com/>）をご覧ください。お問い合わせください。

●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

（一財）北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709) 5212

e-mail:pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●（一財）北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第750号 令和8年2月1日発行

発行 （一財）北海道開発協会

印刷 （株）須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

本 社	〒060-0031 札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861 札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発 寒 事 業 所	〒063-0835 札幌市西区発寒15条12丁目 1-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
北 見 事 業 所	〒099-0878 北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812



h-rm.co.jp/



豊かな人間環境の創造に貢献

清流 [美々川]

地下水から川が始まり、湿原の中を蛇行し、生き物の宝庫ウトナイ湖につながるこの美々川は、広大な石狩低地帯においても唯一の原始河川として、その美しい姿を残しています。



株式会社 ドーコン

本社／〒004-8585 札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4番1号 TEL.011-801-1500 FAX. 011-801-1600 URL <https://www.docon.jp>

